

經濟史を中心とした歴史の研究に志して五十有余年

尾 上 一 雄

まえがき

成城大学『經濟研究』の第九十六号を私の「古稀記念号」としてくださること、そして私がなぜ学問に、特に「經濟史を中心とした歴史の研究」に志し、なにを考えながら、そのためにどんな道を歩み、なにをし、初志を貫くために今後どのように研究を進めたいと思っているかということを書く機会を与えられたことに先ず深く感謝したい。

私は、これまで、「なぜ經濟史を専攻することにしたか、そのなかでもなぜ特にアメリカ經濟史を選んだか」とたずねられても、「なぜアメリカ史の研究に情熱を燃やしているのか」とたずねられても、「話せば長いことで」と極く簡単に月並なことしか答えなかったし、「大学の学生時代の指導教授は」とたずねられても通常の意味での研究指導教授の名を挙げることはできないし、私の研究論文の多くがそして特に著書は政治史あるいは外交史の領域に踏み込んだものであり、学問を職業とする者は隣接領域の縄張りを侵すな、専門への自己閉塞に堪えよと力説したマックス・ウェーバーに咎められたら——私は「經濟史」「アメリカ經濟史」の教授として教壇

經濟史を中心とした歴史の研究に志して五十有余年

経済史を中心とした歴史の研究に志して五十有余年

に登っていた時は一年間それぞれ三十回足らずの講義では狭い専門の檻の中に身を縮めていなければならなかった一方で、幸い「現代史」の教授でもあったので「現代史」の教授として教壇に登っていた時は政治史、外交史に積極的に侵入したが——反論したいこともあったので、このような機会を与えられたことを嬉しく思う。

「経済史を中心とした歴史の研究に志して五十有余年」と題して書かせていただくことにしたにしても、私が経済史の一分野であると同時に歴史学の一分野でもある経済史学に就いてよく知るより早く歴史の研究に志し、それを「職業」とするかどうかということより「一生の仕事」としようと考えようになった「志学」の年（周知のように『論語』の中の「吾十有五而志于学」という言葉に由来する十五歳）の頃から書き始めたいと思っただが、歴史の研究を「一生の仕事」と心に決めることになったのは私の家系と生い立ちに深い関係があるため、これらことから書かせていただかなければならない。

英語で *personal history* とは履歴書のことであり、私は履歴書はなん度も書いたが、ここに書こうとしている個人の *history* を書くのは初めてである。私の個人の歴史まで「経済史を中心」にすることも、経済生活に就いて言及することも避けさせていたが——成城大学での給料・賞与等さらに退職金の金額まで書かなければならなくなるので——、私が今まで心の奥底に秘め、だれにも語らなかつた多くのことも偽らなく且つ飾るところなく書きたいと思う。これがこれを読んでくださる方々のお役に立てば幸いであるが、そうでなくても、第一次世界大戦の初期に生を享け、封建社会の名残をまだ濃くとどめていた地で「他国者」と言われながら少年時代を過ごし環境に反撥して歴史家を志し三年間で卒業できた旧制大学に四年間在学し、会社員も経験し、第二次世界大戦中には南方派遣軍に従軍し、従軍解除後復員の五年後（大学卒業の十年後）によりやく大学教師

(専任講師)になり、経済史を講じ、間もなく現代史も講じることになり、昨年度末に定年退職を迎え、教授の職を解かれて名誉教授の称号を与えられ、だれはばかることもなく「経済史、政治史、外交史を総合した歴史」家として生きることができなくなったのを「新しい出発」と思い、その誌名のためだけにみずからそうしたいと思っただけなので「経済史を中心」に据える研究成果をそれまでと同じように成城大学『経済研究』に発表させていただけることを、それをこそ「名誉教授」の「名誉」と思い、「古稀」という語を「古来稀」と思わず「古は稀れ」なれどと読みたいと思っただけでいる体重四十三キロ(成城大学に職を得た時と同じ)の瘦軀の一歴史家のこのようにしか生きられなかった生き方と現在の心境を見ていただきたい。どう批判されようかと思う。

一

私は、ヨーロッパで大戦が始まり日本が参戦してから一年を経たばかりの一九一五年(大正四年)九月四日に、熊本電気株式会社(現在、九州電力株式会社)の変電所の一つがあった熊本県八代郡鏡町(現在、宮原町)の変電所に隣接した社宅で、その所長をしていた尾上留(おのゑひさし)の長男として生まれた。私は十月になってから生まれるはずだったそうであるが、九月一日未明から台風で、一羽の鷺が変電所の中に舞い込み大騒ぎになり、電気工手たちが保護し、父が家に連れて来て翼を休めさせた後に放してやったのと殆ど同じ頃、私が生まれたと聞いている。

父は私が物心ついた頃からよくこのことを話してくれたが、私はまたなん度も「わが家の姓は清和源氏の一武将が播磨の国の尾上(おのへ)という所(現在の兵庫県加古川市尾上町)に小さいながらも城塞を構えたことに由来する。池田光政が備前岡山藩主になってから明治の初めまで岡山藩士であった先祖の末裔であるだけでなく、鷺が誕生を

経済史を中心とした歴史の研究に志して五十有余年

告げに来て『燕雀安んぞ鴻鵠の志を知らんや』ということを教えてやって欲しいと言いに来たことを忘れるな。

(鶯がアメリカ合衆国の国章だとは父は知らなかったか?) 『一雄』と命名したのは長男だからというだけではない。『尾上』は『峰の上』という意味があり、山の頂に『ひとり』毅然と立つことができる男であって欲しいと思ったからだ。そしてあえて『雄』にしたのは岡山藩主の一族(特に元岡山藩主・因州鳥取藩主)のなかにその字がついた名を持つものがいたということで岡山藩士は子どもにその名を付けることを遠慮しなければならないと聞いていたので今ならもう遠慮はいらない、藩を超絶するものになってほしいという気持からだ」と聞かされた。私は運命論者ではないが、一人「我が道」を行くことになってしまったのは私の姓名によるのかと思いがら、学問に志したからには、その高い山の上に立たなければならないと思うものになったのである。

アメリカが参戦したこと、日本とアメリカを含む同盟および聯合國側(いわゆる連合国側)が勝利を取めたこと、講和会議で日本代表がどんな努力をしたかということ、世界の恒久平和のための国際機関(国際聯盟)がつけられ日本がその常任理事国になり、日本はようやくイギリス、フランスと肩を並べる国になったことなどは、三井物産のニューヨーク支店にいた伯父(父の兄)が父によく手紙をくれたことで九州の片田舎にあった私の家の中で話題になっていたため私は物心ついた時から知っており、また父が父の伯父(私の大伯父)・花房義賢(元岡山藩士)が日本代表として朝鮮に行き元山、仁川の開港を要求し、初代朝鮮駐在公使になり(その前後に)タウンゼンド・ハリスが日本で果たしたのに近いような役割を果たしたと話してくれたことが、小さい時から私の頭に国際問題に対する関心を植えてくれた。更に、父は「お前の曾祖父(父の祖父)はもともと血縁関係が深かった加世家から養子に來た人で(その後、加世家は嗣子を失い幕末に断絶。もう一代続いていてからなら父がそ

の家を嗣いだはず)、その初代岡山藩士はもと伊予大洲藩士で、日本陽明学の祖・中江藤樹が大洲藩主に招かれて来た時に藤樹に学び、藤樹が大洲を去るや脱藩して藤樹のもとに行き、後に藤樹の子が池田光政に招かれたとき熊沢蕃山などとともに関谷巖(関谷巖(関谷学校)の創設を光政に勧説し、学校奉行になり(後に、私はその人が藩主の藩宮郷学といわれている関谷巖(関谷学校)の創設を光政に勧説し、学校奉行になり(後に、私はその人が藩主の墓を楯にして学校の安全を守る策を講じたことを知って驚嘆した)、町奉行にもなり文武両道に秀でていたという小さな人名辞典や日本史辞典にも陽明学者と載せられている加世八兵衛次基であり——学者としての名は加世季弘であるが(後に、中学生時代、私は新聞に連載された小説の中でその人の江戸での剣術と学識に就いて読み、フィクションにしても実名を出した典拠を聞きたいと思っているうちにその著名な作家は死去された)——、その先祖は源平時代に関東武士として知られている」と私が小さい頃から教えてくれた。また、母は、父に負けず、自分の方の「先祖は筑前福岡藩士(いわゆる黒田武士)で、お前の曾祖父は幕末の動乱期に平野國臣や僧・月照等とともに『国事に奔走』した」と教え、父は「岡山藩は学問を重んじた」と言っていて私に小学校に入る前から『論語』を暗記させようとし、母は『平家物語』や『太平記』を初めの部分だけでも暗記させようとしていた。このようなことが私を歴史の研究への道に導いたことは間違いない。

一九二二年(大正十一年)に、父が熊本県八代の変電所の所長をしていた時、私は学齢期を迎えて八代町(現在八代市)の小学校に入学したが、先ず困惑したことは同級生の言葉がよく聞きとれなかったのに加えて私の言葉が「おかしか」(珍妙なという意味)と笑われ口まねされたことである。私は町から離れたところにあった変電所の構内の自宅で生まれ育てられ同年輩のものと遊ぶ機会がなく、岡山訛・岐阜訛(母は岐阜に長くいた)を残して

経済史を中心とした歴史の研究に志して五十有余年

経済史を中心とした歴史の研究に志して五十有余年

いても標準語に近い言葉ばかり耳にして、ほぼ標準語と言っていい言葉を話していたからであるが、そのため私はたちまち「他国者」の烙印を押され、「郷に入れば郷に従え」という古諺に従う余裕などなく、顔つき、頭の形まで違われ思われ思いたくないあだ名を付けられ、「いじめ」の対象にもなってしまった。八代は肥後熊本藩の支藩の城下町だったところで、その頃の小学校の先生はその藩士や郷士の末裔が多く、先生たちまで（師範学校の先生も熊本弁だったので）私の言葉が「おかしか」ったようである。その頃は標準語を聞くことができる放送・放映のラジオやTVもなく発声映画もなかったのである。家に帰って父に苦境を訴えたら「他藩の者に負けるな」と剣道を習わせられ、武士の末裔としての教養＝儒学と日本の古典を身に付けろということになった（この武士の末裔はやがてより一そう洋学に目を向けることになったが）。「いじめ」はその剣道で克服したが、「他国者」と言われるたびに私はこの狭い日本でなにか「他国者」かと思いつながら、剣道を習い続けて不撓不屈の精神を培うとともに、地域根性の根源を探り、それを公然と批判できるよう史書（先ずやさしく書かれたものであったが）読み始め『日本外史』も読んだ。そして、小学生時代から武士の末裔として恥じないよう生きたいと思った私は、「武士道とは何か」と探求していたが、それに満足できる解答を与えてくれたのは、中学生になってから「英会話の勉強になる」からと父の知人（岡山にある私の家の菩提寺の先々代の住職の子とかで父が勤めていた会社の電気技師）に勧められて通っていたキリスト教教会に来ていたアメリカ人宣教師が見せてくれた Inazo Nitobe, *Bushido: The Soul of Japan*（新渡戸稲造著『武士道』の原文）であった。私はそれを先祖のひきあわせと喜んだが、それにして自分が武士の末裔と強く意識することも悪いのではないかと反省もし、宮本武蔵が言ったと後に聞いた（小学校六年生の時に、彼の終焉の地・熊本に移って、『五輪書』を書くために籠った金峰山西腹の靈巖洞も見、墓に詣でも

し、その人のことに就いて多くのことを聞くことができたのは幸いであった。「天地の間に我あり、我をもつて始めとす」という考えに近づくことになった。なお、宮本武蔵は一般に美作国吉野郡宮本村（現在の岡山県英田郡大原町宮本）の生まれと言われ、小説や映画では「作州浪人」とされているが、彼自身『五輪書』の中で「生国播磨の武士」と書いており、『播磨鑑』の中では彼は播磨国揖東郡鵜宮本村（現在の兵庫県揖保郡太子町宮本）の生まれとされている——いずれにしても、私と縁の深い地域の人である。

電機大学の前身の学校で学び東京大学の前身の大学の工学部で働いたことがある私の父は自分の果たせない「電気工学の教授か「電気」の時代」の発明王になる」夢を私に果たさせたいと思って、私が小さい時から電池をつくらせたり、小さな電気モーターを買ってくれて電車をつくることを教えてくれたり、発電機や電信機や電話機をつくることを教えてくれたり、無線電信の実験をさせてくれたり、高等数学まで教えてくれようとし、私に電気工学に関心を向けさせようと努めていた。小学生時代、私がそのようなことに大きな興味を持ったことは確かであるが、そのような父の期待を裏切ってしまった。しかし、父が与えてくれた科学教育が私に「科学する心」と合理主義精神を持たせてくれたことは確かなことと知っている。それにしても、父の期待からはずれて行く私は父母にとって「可愛くない子ども」になってしまったと言わなければならない。

私は、小学校六年生の夏休みの少し前に父の転勤のため熊本市に移り、熊本で名門といわれていた市立の小学校に転校し、そこで「田舎の小学校からの転校生」と言われ、翌一九二八年（昭和三年）に学科筆記試験をまたず面接試験だけでその入学試験に合格して熊本県立熊本中学校に入学したが、私の言葉は標準語で、相変らず「他国者^{よそもん}」であった。熊本市は、早くからキリスト教文化が入って来たところだったにしても、加藤・細川・肥

経済史を中心とした歴史の研究に志して五十有余年

後五十四万石の城下町として発達して来たことを誇るところであった。その中学校の先生の半数ぐらいは旧熊本藩士の孫かその縁者で、その人たちが学校内で大きな顔をしていた。旧藩主やその一族を「細川」とは呼んでならず「細川さん」と言えと同級生から注意され、加藤清正は日常語では「清正公様」でなければならず、同級生はみな肥後人であることを誇りにしていた。日本史の教師は旧熊本藩の家老の孫と誇らしげに言っており、それだけならよかったが、夏休みの宿題に「先祖や郷土に就いて」書いて来るよう言われて私が書いたものを見て「お前のようなものたるもんがおるけんから歴史は教えにやなほらん」と言っ返したので、私は細川忠利に招かれた宮本武蔵（兵法者の矜持を堅持して家臣でなく十七人扶持・合力米十八石の「客分扱い」にそんなことが言えるか、「歴史学は『現代の兵法』と覚えたり」と活眼した気持で、歴史の知識で逆襲し沈黙させた。私は、それで日本史の成績を案じたが、最高点をもらい、その人も「さすが武士の子孫」と思った。私はその頃『史記』も読み始めていたが、村川堅固編訳『興亡史論叢書』も読み、頭の中でギボンやランケとも話し、事実と虚構とを峻別し、広い視野と深い洞察力を持ってとらえた過去の事実と作られた神話を区別すべきことも知り、またいくつかの史書や歴史をつくったと言われた人々の伝記に「このことは後世の歴史家の批判にまかせろ」とか「後世の歴史家が認めてくれるだろう」という言葉があるのを見たり、「歴史は繰り返す」と学校で教えられているが「歴史を知らず歴史に学ばないから同じ過ちを繰り返す」と考えたりしているうちに、誤った史観（その頃はそれらに就いて少ししか知らなかったが）を持ち生半可な歴史知識しかないのに「歴史を見れば」と言う自称歴史家や為政者が国を誤らせるのではないかと思ひ、史学を「現代の兵法」と見て歴史の研究を一生の仕事にしたいと思うにいたったのである。私はその時まさに十五歳、「志学の年」であった。その頃、不況の波が全世界に広がろうとしていたが、

私はその五十四年後に『フーヴァ大統領の不況対策——ニュー・デイルへの道——』（後に触れる）の原稿を夜を日について書いているとは考えてもみなかった。しかし、私はその書の「はしがき」に「本質的でないかなる批判も受けて立つ用意がある……」と書いた時、「志学の年」に思っていたことを忘れていないと思いつながらそう書いたのであり、またそれが経済史の書か政治史の書かと問われれば経済史を大刀とし政治史を脇差とし両者を一体としたこれぞ、我が「二天一流」と答えたい気持でいたし、それより先『アメリカ政治経済年代史——他の主要国との比較を加えて——』（後に触れる）を書いた時もそうだったと言わなければならぬ。

二

私が中学校を卒業し、熊本にあった第五高等学校文科甲類に入学したのは満洲国建国の翌年、アメリカではフランクリン・D・ローズヴェルトが大統領に就任してニュー・デイルを開始し、ドイツでアドルフ・ヒトラーが独裁権を獲得し、日本が国際聯盟を脱退して間もない一九三三年（昭和八年）四月のことである。

私は第五高等学校（熊本にあった旧制高等学校。以下「五高」という略称を用いる）に入学して初めて「他国者」扱よせもんいされなくなった。私が言葉を変えたからではなく、同級生は熊本県内からだけでなく、九州の他の県、九州だけではなく近畿地方からも五高の校風に憧れて入って来たもので、熊本県内から来ていたの方が少なかったように、私は初めて差別を受けないで進む環境におかれた。同級生はみな、私の姓を「おのえ」（旧仮名づかいでは「をのへ」であるが）と言ってくれた。中学校までは、先生までが訂正を要求しても「おのうえ」と呼んだ。熊本県の南部と鹿児島県には「おのうえ」という人が多いが、その人たちは平家系統の人たちと聞いていた。私は

経済史を中心とした歴史の研究に志して五十有余年

經濟史を中心とした歴史の研究に志して五十有余年

源氏・平氏ということにこだわるなど言われても、違った読み方、呼ばれ方をされるのは嫌である。それだからこそ、私は研究論文や著書に外国人の氏名を片仮名で書く時、間違った読み方をするのは礼を欠くことと思ひ、あらゆる手段を講じて正確な読み方を調べており、なにごとにも正確を期するのは学者の基礎的態度と信じている。地名も外国語の片仮名書きもそうであり、現代仮名づかいや常用漢字の書き方には従つても、政府が不正確な書き方を押し付けてきたら（政府機関や新聞社その他の報道機関がそれに従つても）、妥協にも限度があるとして、「一切の表現の自由」を保障した日本国憲法第二一条に違反しないかと徹底的に争うつもりである。負けたらどうするかと問われれば、その後は原語で書くことにすると答えておこう。

そのことはともかく、周囲のものはそれぞれ志を持つものであった。私が「壮大な歴史を書きたい」と言つても「古い断片的な記録を掻き集めて歴史を書いて誤りを犯すから、今後の歴史とくに国際関係史を書くために現場にいたり記録とくに公文書を広く見たりすることができる外交官になるうか」と言つても「大学教授の方がいいかな」と言つても誰でも話に乗ってきてくれ、自分の抱負を話してくれた。また、私が「神皇正統記の論理はおかしいよ。天皇の先祖を初めから神々と決めているから日本は神国ということになる。天照大神のだんなさんには？」と言つたり、「軍人勅諭（明治十五年に軍人に賜つた勅諭）の中の五箇条は学校の「軍事」教練の時間に耳にたかができるほど聞かされても、その全文を教えてもらえないのは『軍隊は代々（世々々々）天皇の統率し給ふところにして』という書き出しから歴史事実を反しているからか」と言つたり（軍人勅諭と言へば、大学に入学してから、大教室での「教練」の時間に配属将校からその「五箇条を言え」と言われて、「一つ、軍人は政治に関与すべからず」と答えた豪傑があり——勿論そのようなことは含まれておらず、もし明治天皇がそのような勅諭を与えていたら、そして軍隊

に対する文民統制が帝国憲法に規定されていたら、満洲での軍部の独走も抑止され、日中の全面戦争も、従ってアメリカとの戦争もなかったら——、満場の大喝采を博し、「名前は？」と聞かれて「菊地武時です」と答え、大きな拍手を受け、当時誰でも知っていた南朝の肥後の忠臣の名を名乗った皮肉と公卿が武將の軍略に反対して南朝を苦しめることになったことを示唆して軍人の怒りを封じた奇知に感嘆したが、それが五高の卒業生かどうかは私の席からは確かめることができなかった)、「張作霖を爆殺した関東軍の大佐は停職になったそうだが、刑法の国交に関する罪で死刑にならないのか、軍人には刑法が適用されないのか」と言ったり、「マルクスは『すべての書かれた歴史は階級闘争の歴史である』と書いているが、歴史をそう簡単に割り切っているか」と言ったりしても、話しに乗ってきてくれるものがいたし、「ヘーゲルは『悲劇は正邪の闘争からよりは正義と正義との闘争から生じる』と言っているが、正義とはなにか」と言っている論じあうこともできたりして、私は市内にある家から通学できたので寮に入らなかつたが、「……：西海月の清むところ武夫原頭ぶひげんまに書を抱いて、鳴かず飛ばすにここ暫し鼓空の翼養はん……：」と寮歌をうたい(武夫原とは五高の運動場一帯の名称)、初めて伸び伸びした気持を持つことができた。

また、私は五高に入学してクラス担任の上田良吉教授(英語)が第一時間目の授業の初めに「君たちはもうジュエントウルメンである。オックスフォードやケンブリッジの学生たちはその意識を持って試験の際に一切不正行為をしないので試験の監督はいないと聞いている。諸君は彼等より立派でなければならない。人生の競争においても……：」と言われたのを忘れることができない。私自身、試験の際に一度も不正行為をしようとしたこともないが、同級生の不正行為を見たことも聞いたこともない。私たちは「剛毅木訥は仁に近し」という『論語』の中の言葉を五高の校風としていると言いながら談論放歌しても、大学に入ればますますジュエントウルメンとして、

経済史を中心とした歴史の研究に志して五十有余年

経済史を中心とした歴史の研究に志して五十有余年

五高の名譽にかけても不正行為をせず（五高の名譽にかけても特に思ったのは、私たちが大学に在学中、日刊新聞——東京朝日新聞だったか東京日日新聞だったか——で「東大経済学部試験で不正行為」という記事を見て驚き、それに不正行為を行なった二人の学生の氏名と彼等の出身高等学校名が明記されていたのを忘れずにいるからである。なお、その高等学校はもちろん五高でなかった）、その後の人生の競争の場においてもフェアでなければならぬというエリート意識を持つものであったと言うことができる。同級生（その四分の一が戦死した）の全員の氏名と同級生時代の彼等の顔は私の脳裡に焼き付いている。

私は、あとになって考えてみて、「経済史を中心とした歴史の研究」者になるためだけでなく、その前に先ず生きるためにも、法制経済の樋口兼雄教授、西洋史の布川豊教授、英語の山形元治教授・河瀬嘉一教授・前記の上田良吉教授のほかJ・G・マーター講師（オックスフォード出身）、独乙語の藤井外興教授、秋田実教授、G・H・ドル講師、漢文の岡井慎吾講師等々誠にいい師に恵まれたと思う。それらの方々だけでなくほかの教授もそれぞれ風格があり、いま考えてもすばらしい学力を持った人たちだった。それらのうち樋口教授には戦後にも特にいろいろお世話になったが、先生が東京で御健在なのを嬉しく思っている。なお、私は五高に入学してから馬術部に入っていたが、「少年老いやすく学成り難し、一寸の光陰軽んず可からず」と思い、盲腸炎を患った機会にやめ（それには後に書く理由の方が大きかったが）、父が勤めていた会社の剣道道場に行つて電気工手たちと剣道というより昔風の撃剣をすることも少なくし、図書館で哲学書を読み、家では史書を読み、更にシャーロック・ホームズを原文で読みながら推理を楽しんだ。日本史に興味を持って、事実と虚構を区別しようとして深く入ろうとしてもタブーが多すぎたので、幕藩体制と幕末からの外交史にますます大きな関心を向け、後にそれを世界史

の中で捉えることにしたいと思ひ——史書と言へるかどうかは別として陸奥宗光著『蹇蹇録』けんけんろくに深い印象を受け——、大類 伸、坂口 昂、原 随園等々の著名な歴史家の文化史中心の歴史に満足できず（そのため、私は文学部西洋史学科に進む気持を早くから持つことができなかった）、トマス・カーライルの『フランス革命史』、ジョージ・グーチの『同年代史』などを原文で読み始めた。また、マルクスよりジャン・ジョレスに人間性を感じた。

私の家は、私の志学の年の頃から、第六師団の砲兵連隊の兵舎の横の垣根と路地を隔てたところにあつたので、砲兵隊内から流れて来る空気からその出動を察することができ、満洲での戦火の拡大を案じていた。私は中国大陸に出動する将兵の隊列をなん度も見送つたが、その凱旋を見た記憶はない。私が加わつた五高馬術部は砲兵隊の軍馬を使わせてもらい主にその中の馬場で軍人の指導を受けて練習していたが、私はそれを職業軍人でない被召集兵たちはどんな気持で見ているか、私たちが練習を終え掃除を済ませて「自由の世界」に帰って行くのをどんな気持で見ているかと思うと苦しくなり、自由の尊厳を知っていた私は堪えられなくなったことも馬術部をやめた理由である。私は剣道や馬術の練習に費す時間を専ら外交史と国際関係に関する専門書を読むことに向け、次第にその時間を多くし、また満洲問題を考えながらなん冊も国際法の本を読んだ。私は、ヒトラーのドイツの動きにも不吉なものを感じながら、独裁制こそ好戦的、また同じ誤ちをくりかえすかと見ていた時、駐米イギリス大使をつとめたことがあるジェイムズ・ブライスの『近代民主政治』を原文で読み始め、世界の主要国の歴史文書とつくられつつある歴史を現場で見まわることができる外交官になりたいという希望をかためることになった。心の底に大伯父・花房義質がいたのかも知れないが、私は外交官になつても外交官であるよりは歴史家でありたかつた。

—— 経済史を中心とした歴史の研究に志して五十有余年

経済史を中心とした歴史の研究に志して五十有余年

皇国史観を嫌った私は唯物史観を、それもまた、歴史を片目で色眼鏡めがねをかけて見るものと考えるにいたっていたものの、歴史の底流にあるものは「経済」ではないかと思うようになっており、日本軍の満洲への侵攻もファシズムやナチズムの出現も経済不況に基因するものではないかと感じ、中央ヨーロッパ諸国の経済的困窮はヴェルサイユ条約によるものではないかと思うと法制経済の教授で、馬術部長で私が馬術部をやめた後も親切にしてくださいっていた前記の樋口教授に話したらジョン・メイナード・ケインズの *The Economic Consequences of the Peace* を読むことを勧められた。それを読んで、その “the Peace” も政治・外交ではないかと思ったが、それまでスマイス、リカード、マルサスの経済学に関する本を見ても、マルクスの『資本論』『経済学批判』を見ても感動しなかった私は大いに経済学に関心を持つものになり、アーノルド・トインビーの『十八世紀のイギリスにおける産業革命』を読み、ウェルナー・ゾムバルトの『近世資本主義』をドイツ語の辞書と首っぴきで読んでいるうちに大学の希望「学部」を決めなければならない時期を迎え、入学試験に就いても考えなければならなくなつた。大学は東京帝国大学（以後、東京帝大という略称を用いることにする）と決めていても、法学部政治学科か経済学部経済学科か決めかねていた。

入学試験科目は私が受験する前の年から、それまでは法学部も経済学部も外国語（英・独・仏語のうち一カ国語）だけだったのに、そのほか法学部は作文（小論文）、経済学部は日本史、西洋史ともう一科目が加えられるようになり、正式に試験科目が発表されるのは全国一斉に高等学校の卒業式の当日とされていた。いずれにしても、入学試験の受験準備をしていなかった私は冬休み中に上京する機会を得、東京で会った一高生たちの英語の力を見て英文和訳でも和文英訳でも「一高生恐れるに足らず」と絶対不負の自信を持つことができたが、上京のなによ

りの収穫は、神田の古本屋で、フレデリック・ジャクソン・ターナーの *The Significance of the Frontier in American History* とチャールズ・A・ビアートの *The Economic Basis of Politics* と *An Economic Interpretation of the Constitution of the United States* を手に入れることができたことであり、特にビアードの “Economic” という言葉が私を経済学部に進めさせ、歴史は現代の解明のために研究すべきものであり、歴史の方向を決定させる要因は何か、更にそれを条件づけるものは何か、悠久の歴史の中で現代はどのような意義を持つかと考えていた私のその後の進路を決めさせることになった。こうして、私は、歴史の研究のうちでも、その中心に経済史の研究を置くことに決めたのである。卒業試験中に二・二六事件が起こり、なにが起こったか新聞や熊本放送局からのラジオ放送では詳しいことがわからず、私は夜になると上海からの英語でのラジオ放送を聞きながら日本の将来を案じていた。

卒業式の時に聞くことができた大学の入学試験科目は外国語、日本史（織豊時代以降）、西洋史（十八世紀以降）のほか論理学で、英語はそれまで（法学部のように和文英訳が課せられる代わりに）法学部よりなん倍も長い英文和訳が出題されていたので、私は「今年も同様」と予想し長ければ長いほど有利と思った。そして、私は大学に入ることを楽しみにしながら、熊本から東京まで急行、関門連絡船、特急に乗っていた二十三時間、論理学の本を読んでいた。なお、入学試験の問題は——長文の英文和訳の問題は書くことができないが——日本史は「鎖國に就いて論ぜよ」、西洋史は「十八世紀以降におけるイギリスの政治上の諸改革に就いて述べよ」、そして論理学は「社会科学の研究における演繹法と帰納法に就いて論ぜよ」という問題だったと記憶している。

旧制高等学校の教育と雰囲気と大学の入学試験を思えば、当時は全く「古き良き時代」であった。

経済史を中心とした歴史の研究に志して五十有余年

こうして、私は一九三六年（昭和十一年）四月に東京帝大経済学部経済学科に入学したが、入学式の後の新入生歓迎会の時、私たち五高卒業生グループの中に入って来られたのは難波田春夫先生（当時は助手、以下すべて当時のまま教授、助教授と呼ばせていただく）で、学問の道がいかに険しく厳しいかと話して下さったことが私の闘争心をかきたたせてくださったことに深く感謝している。講義が始まって、河合栄治郎教授の「ドイツ社会民主党史」の特講を受講し、河合教授が「諸君、学問の高い山頂からは、下界の日常生活の雑踏の中にいるよりも早く新しい日の曙光が見えます。諸君も今までに高山の山頂から日の出を眺めたことがありますか。深紅の縁が新しい光の前触れとして地平線の果てを赤く血のように染めます。霧と雲とが湧き起り、塊集し、曙光の方へ身を投げて、一瞬その光を包みます。しかし、地上のいかなる威力も、徐々にして荘厳な太陽の昇天そのものを妨げることにはできません。そしてその太陽は一時間の後には……輝き照り……天空に懸っているのであります。毎一日の自然の光景の一瞬間たるもの、それはなお遙かに目覚ましい世界史上の日の出の光景における十年、二十年であるのであります」というフェルディナンド・ラッサールの『労働者綱領』の結び言葉を聞かせて下さったことも終生忘れない。但し、ラッサールの「学問」とくに彼の「賃金鉄則」には反対であると断っておきたい。

私は、前に書いた私の氏名が意味していることと結び付け、学問の高い山の頂から世界を眺めたいと思い、その頂に立つための山はできる限り高くしたいと思い、高い山を築くために底部は広く且つ固く山麓も広くしなければならぬと考へ、経済学部の学生になったからにはなにより経済学を勉強しなければならぬと思つて謙虚

な気持で受講しただけでなく、総合大学の学生の特権を利用して、法学部、文学部の講義も聴講することにした。図書館に、私が五高生だった頃苦心しながら手に入れて読んでいた *Nineteenth Century and After, Current History, Foreign Affairs* などの英・米の雑誌があったのが嬉しく古いものも借りて読んだ（それがいま役に立っている）が、そのうちの後二者だけでなく特に前記のビアードの著書を読んでアメリカに関心を深くしてきていたのにアメリカに関する本が少なくアメリカ研究のための第一次資料は殆どなく、世界大戦（もちろん第一次大戦）に就いての研究書も少ししかなかった（グーチが編纂した大戦原因史料集ぐらいはと思ったが、見る事ができなかった）ことに失望した一方で、マックス・ウェーバーが『職業としての学問』の中で大学の教師になるのは「僥倖をまつよりほかない」と言っていると聞き（岩波文庫の中にある邦訳はまだ出版されておらず、原文でそれを確かめた）、日本でもそうらしいと思い、僥倖に賭けるのはやめようと思い、ケインズがインド省・大蔵省の役人から経済学者になったこと、河合栄治郎教授が農商務省の役人であり、田邊忠男教授（経済原論）が会社社員であったこと、欧米で外交官が歴史家として登場しつつあることも知り（まだジョージ・ケナンは知らなかったが）、やはり研究資料は自分で探しまわらなければならないと思っその手段を考え、「歴史家」になるためにますます外交官になりたいたいと考えるようになり、フランス語にまで欲をだしながら、日曜日以外は九時半の閉館時間が過ぎて追いつかれないまま図書館で本を読み、昼食と夕食を学生食堂以外で食べた記憶は殆どない。私は、下宿に帰ると、思想統制のため発禁になりそうだと思って買っておいた本（発禁になっていなくても持って歩いて特高私服刑事に見つかると大変だった）を読んだり、人間性に欠けることにならないようにと岩波文庫に入っているぐらいのはと思っって文学書も読んでいた。そして、日曜日には、埼玉県にいた叔父の家にしばしば行き、中学生だった従弟に防

経済史を中心とした歴史の研究に志して五十有余年

經濟史を中心とした歴史の研究に志して五十有余年

具を着けさせ私は防具を着けず庭で剣道をしたことを思い出す。

經濟史を中心しながら政治史、外交史を一応平列において勉強しようと考えながら講義を聴き、本を読み、マックス・ウェーバーが学問の専門分野に閉じ込めり、隣接分野を侵すなど言ったのに、彼自身、法学、法制史、經濟史などを専攻し、宗教社会学、政治学に足を踏み入れ、資本主義とプロテスタンティズムの關係を論じたのはなにごとぞと思ひながら法学部の政治学の講義を聴講していた時、矢部貞治教授が「学問の真理は、それぞれの学問の中心にあるよりは他の隣接学問との接点にある。それぞれの学問の中心に奥深く入って行くことに努めるとともに、隣接学問の研究に努め、接点にその真理を求めなければならない」と言われた時、私は感激のあまり涙を流し、隣の席にいた三高出身の法学部学生（同じ下宿にいて大学生時代一番親しくしていた）に「どうしたんや」と言われたことを忘れることができない。それ以来、私は遠慮なく、經濟史を中心にして、政治史、外交史、法制史、社会史、宗教史に踏み込むことにしたのである。二年生のころ岡義武助教授が第一分冊、第二分冊：として書かれ法学部の窓口で買うことができた『歐洲政治史講義案』は印象深く（その特に初版がすぐれていると思った）、その講義も聴講したが、私はそれに経済的裏付けをしたいと思いますと思った。

私が、二年生になり一緒に経済学部に入學した五高での同級生が「演習」（ゼミナール＝選択科目）に入っても、入りたいと思った本位田祥男教授の「歐洲經濟史演習」に背を向け、いわゆる「指導教授なし」ということになったのは前記のような理由で外交官になるための試験を受けたいと思ひ、その準備をしたかと思ひただけでなく、否それ以上に「經濟史」に自分を閉塞させず、できる限り多くの講義を聴き、多くの本を読みたい、見まわせば無数のすぐれた師がいると思ひたからである。その年（一九三七年）七月に蘆溝橋事件が起こり、日支事変

(いわゆる日中戦争であるが、常用漢字を使うことにしても、歴史家たるものは当時の呼称に従うべきだと思っている)が始まり、十一月には一年前に結ばれた日独防共協定にイタリアも加わり、やがては三国同盟が成立するのではないかと案じながら、私はいよいよ外交官になって、つくられる歴史の現場を見、後に史料になるものを集めておきたいと思っていたので、『君府海峡制度史論』で法学博士になりエリック・ブランデンブルヒ(ライプツィヒ大学教授)の名著 *Von Bismarck zum Weltkrieg* (『ビスマルクから世界大戦まで』)の邦訳でも知られた元オーストリア等の駐在公使の芦田 均氏が大学に講演に来られた際、私は芦田氏が満洲事変に際しての外交政策を不満として外務省を辞められたことを忘れ、歴史家になるために外交官になることに就いて助言を求めたところ、「陸軍省外務省に入るのはやめなさい。そのような考を持って外務省に入ったら直ぐにはじき出されるよ」と言われ、私の外交官熱はすっかり冷えてしまった。私はその後芦田氏(周知のように、戦後、芦田氏は首相になられた)の名を聞いたり芦田氏の外交史に関する著書を読んだりするたびにそのことを思い出すが、それで私は日本のジョージ・ケナンになりそこなったかと思うこともあるが(そのことを残念に思わなくてもいい、彼の著書をよく読んでおり、それに経済史を加えたいと思っているので)、私が外務省に入れたとしても外交官に向いていないことは直ぐにわかったはずだし、どの国に行かされたかわからず、思うように「歴史がつくられる現場」を見ておくことも研究資料を蒐集することもできず、自分から辞めることにしなくても、「直ぐにはじき出される」ことになっただろう。望み通りアメリカやイギリスに行けたとしても、それらの国の政府に個人的に接近したり大学に行ったりして外交史料も見、研究のための資料を集め「経済史を中心とした歴史の研究」者になるのだと思っていたら、どうなっていたかわからない。ともかく、どうあっても、私はひとり独自の学問の道を歩きたかったのである。

経済史を中心とした歴史の研究に志して五十有余年

経済史を中心とした歴史の研究に志して五十有余年

私は大学に入学してからますます「天地の間に我あり」という考えが強くなり、そして現在と同じようにハーバート・フーヴァーが「ボルシェヴィキ革命を見て書いた」*American Individualism*の中で述べている秩序ある個人主義も「ニュー・ディールを批判して書いた」*The Challenge to Liberty*の中で述べている全体主義に対する非難も素直に受け入れることができるもの——当時の日本では危険思想の持ち主——になっており（まだそれらの本を読むことができなかったが内容は知っていた）、大学二、三年の頃に友人たちに「学びて思わざれば則ち罔く、思わざれば則ち殆し」という『論語』の中の言葉をもじって「学びて思わざれば則ち左傾し、思わざれば則ち右傾す」と言っていたこと（現在は言うべきかは別として）を思い出す。

私が三年生になった頃には中国大陸で戦火が拡大し、軍需景気で東京帝大卒業生は引く手あまたということになり、夏休みが終わって昭和十一年入学の学生が続々と大会社に就職が決まっていたのに、私は大学院に進むか、二年在学すれば卒業できる法学部に学士入学するかしたいと思ひ、就職試験を受けずにおり、そのような希望を伝え諒解を求める手紙を父に出したら、高等学校の理科に入って工学部電気工学科に進んでほしいと思ひ、いたのに文科に入ってしまうし、文科に入ったのなら法学部に入って電気会社を監督する通信省の高級官吏になってほしいと思ひ、いたのに親の期待をすべて裏切つて、その上また……という母から反対の手紙をもらひ、それでもなお大学に残る方法を考へていた時（弟は父母の期待通りに工学部電気工学科に入つて下宿の隣室にいた。なお、ずっと後のことであるが、末弟も、そしてその長男も「電気」への道を歩むことになった）、河合栄治郎教授の『社会政策原理』（教科書）、『ファシズム批判』など四冊が発禁になり、有沢、脇村両助教授、大内教授の休職、年を越すと「平賀肅学」で河合・土方両教授の休職、続いて本位田、矢内原、山田等々の教授の辞職を見ることになつ

た。そして、卒業試験前に父から留年を許してもらえる手紙を受け、私はもう大学院に魅力を感じず喜んで留年することに決めて卒業試験の時に田中耕太郎教授の「商法」Ⅱ（必修科目）一科目を受験しなかった。なお、大学を去られた教授の担当科目の試験の答案は残っておられた助手や専門外の助教授が見てくださったようで「本年度の講義を概観せよ」という題でばかり書かされたことをはつきり覚えている。

さて、この親不孝な子は留年して、法学部の科目と文学部の歴史関係の科目を聴講し、図書館で多くの本を読みながら、また就職試験期を迎え、経済学部長の森荘三郎教授（保険学）に助言を仰ぎに行ったら、高等商業学校の口をさがしてあげようと言われて大いに喜んだが、就職試験を受けにも行かないのなら送金を中止するという手紙が母から来たので、大あわてで神戸に本社がある山下汽船会社の東京支社に入社試験を受けに行って調査部のようなところを希望と言って神田で古本屋まわりをして下宿に帰ったら、「採用通知」の電報が届いており、翌日、大学の経済学部事務室にそのことを報告しに行くと、学部長が呼んでおられると言われ、学部長室に行くと学部長から或る高商に話したので楽しみに待っているようにというありがたいお言葉をいただいたが、事務室にも採用の通知が来ているし、一番早く採用通知を受けたところに就職することになっていると事務室で言われ、学部長から「早まったことをした」と叱られた。就職試験を受けるに必要な成績表を経済学部事務室でもらうにはそのような誓約書を予め提出しておかなければならなかったのであり、誓約は守らなければならないもので、私はひとまず山下汽船会社に就職することにするほかなかった。

後になって思えば、「暗い時代」に入っただけと言われた時に東京帝大で学ぶことができたことは幸いであった。私の在学中の東京帝大が——その後ますます「暗い時代」に入り敗戦後の混乱期を経て改組・改称されたことは

經濟史を中心とした歴史の研究に志して五十有余年

書くまでもないだろう——消えて行く前に蠟燭の光が一瞬その光を増すように、学問の道場として光り輝いていた時、私はその經濟学部に入學し思う存分研究者への道をさぐる事ができたことを幸いと思つてゐる。私は、もし一年おそく入學していたら、特に二年以上おそく入つていたら（繰り上げ卒業になり、四年間どころか三年間入學できなかったはずであり、生徒出陣か学徒動員の中に加えられたらどうから）そのような機会に恵まれなかったと思う。

「暗い時代」と言へば、大学の前に「東大經濟学部をつぶせ」という貼り紙を見なければならなかつただけでなく、図書館の閉館後大学の正門前には一目でそれらとわかる私服特高刑事が徘徊していたし、私もしばしば尾行を受け、留守中下宿の部屋の中を調べられ机の引出しの中も見られたこともあつた——そのようなこともあろうと思つて、引出しの裏に紙を貼つておくそれがちぎれていたり、引出しに「無断で開けるな」と書いた紙を入れておけばその紙が丸めて放り出されたり引き裂かれていたりしたのである。発禁本やその他の危険視されていた本は布団袋ふだんぶくろに入れ、その上に垢あかが付いた下着などを放り込み、その上に布団を置いておくというような対策を考えなければならなかつた。また、夏・冬・春の休みの時に帰省のため汽車に乗れば、山陽本線の小郡駅おこぐんを過ぎる頃から前か隣の座席に三、四十台の年齢の男が来ている話しかけてきて突然トランクやスーツケースを開けて中を見せろと言ふことがしばしばあつた。そのころ帝大の正服・正帽でE（經濟学部）の襟章を付けた（それ以外の服装は当時考えられなかつた）山陽本線の特急か急行列車に乗つていたものなら、だれでもそのような経験があるはずである。そのような男たちは山口県の私服特高刑事で用心してゐないと下関しもつけで警察署に連れて行かれたり、要注意学生として大学や下宿近くの警察署に通報されることになつたのである。私はそのようなことを先輩たちに教えられて帰省の際には読みたい本は荷物として別送し、汽車に乗る時に持つ読み物は大衆小説

か娯楽雑誌のようなものに限ることにし、そのようなものを読んでいると「こんな学生なら思想に問題はない」と思われ無難だった。或る時、私は、『金融資本論』の原典を持っていたのを見つけられ「金儲けのための本」と教えたという友人の得意顔を思い浮かべながら、顔に見覚えのある私服特高刑事に、私の方から話しかけ、清水の次郎長の子分の名を十数人言ってみせたり、国定忠次の話をしたりしたあと、「舞出の長五郎という親分と横田の喜三郎という親分が縄張り争いをしてあわや血の雨という時、立作太郎という関八州廻役が神川の彦松という下役を連れて駆けつけ……」と言ってからかったら、その男は「そんな話は聞いたことないな」と言い（そんな話は聞いたことはないはず。経済学史の教授と国際法の教授——その二十余年後の昭和三十五年に最高裁判所長官に就任——がそのような喧嘩をするはずはなく、八州様は国際法の大家、下役は外交史の教授、「帝大生なら活動（活動写真）映画）を見たり講談本を読んだりばかりしないで、少しは勉強しろよ」と言って私の肩を小突いて立ち去った。うっかり調子に乗って、「天皇機関説の」美濃部の達吉親分でも登場させたら、私は「御用」と声をかけられ「お縄になる」ところだった。あのような時代は一度と来させてはならない。

一九四〇年（昭和十五年）三月——ドイツ軍がポーランドに侵入しヨーロッパで大戦の火ぶたが切られてから半年後、日本軍の中国侵攻を抑止するために中国に軍事援助を始めていたアメリカからの日米通商航海条約の廃棄通告による失効の一カ月余り後——ソ連軍がフィンランドを屈服させようとしていた時、私は残しておいた前記の一科目の試験を受けて、その日のうちに神戸に向う汽車に乗った。私は汽車の中で夜通し、その墓になん度も詣でた宮本武蔵の「独行道」の「……我事わがことにおいて後悔せず。……いずれの道にもわかれを悲しまず。……常に兵法の道をはなれず」という言葉を口に唱えていた。私の「兵法の道」とは「学問の道」とくに「史学の道」

経済史を中心とした歴史の研究に志して五十有余年

経済史を中心とした歴史の研究に志して五十有余年

であったことは書くまでもないと思う。

四

私は山下汽船会社に入社して——卒業試験がすみ次第できる限り早く本社に出社するよう言われていた——、調査部のようなどころがなく、先ず会社の全容を知るようにと経理部に配属された。当時、山下汽船は持ち船は余り多くなくても、備船をあわせて一〇〇万屯の貨物船を運航させ、貨物輸送では日本郵船、大阪商船に大してひけをとらず、業界第一位を目指しており、ニューヨーク、ロンドン、シドニー等々世界の主要港の貨物の動きを見ることができ、営業部でないので一カ月に一日か二日ぐらいしか残業がなく退社時刻になると直ぐ解放されることを喜んだ。初任給は統制下にあったが実質的には国内の他社より多かつたようである。

私は、東京帝大図書館の事務局長から神戸商業大学（現在、神戸大学）の図書館への紹介状をもらっていて、山下汽船の本社を初めて見るより先にそこに行き、図書館を利用してもらえることになったが、土曜日の午後しか行く時間がないのが残念だったし、どこからどうして会社知らされたかわからない（その会社には神戸商大の卒業生がなん人もいた）が、間もなく「土曜日の午後と日曜・祭日は心身を休め、人一倍会社のために働けるようにするよう」部長から注意を受け、その後神戸商大図書館に行くと、きまって部長や専務取締役から注意を受けた。専務取締役が私の保証人になってもらった伯父と親しかったそうで、私は特に注目されていたことがわかり、その大学図書館にあまり行かないことにしなければならなかった。

しかし、神戸にいい洋書の古本屋があったことは幸いであった。ウッドロウ・ウィルソンのプリンストン大学

教授時代の *The History of American People* (5 vols.) も、アリグザンダー・ハミルトン、ジェイムズ・マディソン、ジョン・ジェイがアメリカ合衆国憲法の批准を得るために匿名で新聞に書いた論説を収録した *The Federalist Papers* (特にその中の諸々の経済的利益集団の利害の衝突と政府の役割に就いて論じたマディソンの第十論文は生涯忘れられないものになった)、『ハーバート・フーヴァーの *American Individualism, The Challenge to Liberty*, ルーイス・M・ハッカーの *The United States since 1865* (まだ社会主義者時代の著書で後に全面的に書き直されたが)、『*A Short History of the New Deal* 等々多くの本を買い、下宿に帰るとむさぼり読んだ。それらが私の目を大きくアメリカに向けさせてくれた時、藤原守胤教授(慶応義塾大学)の『アメリカ建国史論』上・下(現在は合本)が出版されたことも大きな喜びであった。

その年の七月に徴兵検査を受けたが、私は色弱なのに加え山下汽船に就職が決まってから胃が急激に悪くなり食欲を失いひどく痩せてしまったので甲種合格はおろか、第一乙、第二乙にもならず丙種と思っていたが、新しく設けられた第三乙になり、第二補充兵役に編入された。この部類のものは「戦局がこれ以上拡大すれば召集される」と言われ、東洋平和・太平洋の平和を望んでいた私は一そうそれを望むものになった。私は宮本武蔵のように「道においては、死をいとはずに思ふ」と言うことができたが、一兵卒として召集されて自由を奪われるくらいならパトリック・ヘンリのように「我に自由を与えよ、然らずんば死を与えよ」と叫びたいと思っていた。私が徴兵検査を受けて間もなく、日本の南進政策が決定され、その二カ月後には日・仏印軍事協定が結ばれ、日本軍は北部仏印(北ヴェトナム)に進駐し、日独伊三国同盟が成立し、日本はいよいよ英米からドイツと同一視されることになり危機が迫って来た。

経済史を中心とした歴史の研究に志して五十有余年

經濟史を中心とした歴史の研究に志して五十有余年

私はなんとかして会社員の生活から抜け出たいと思っていたが、翌年夏、ドイツがソ連に「電撃戦」を開始したのに続き（ソ連は日本の南進政策と日ソ中立条約の締結によって背後の不安なくドイツ軍と戦うことができただろう）、日本軍が南部仏印に進駐し、武器貸与法（レンダリング法）によってイギリスを援助していたアメリカの対日経済封鎖が極限に達しようとしていた時、東大生時代からの前記の三高出身の親友が東亜研究所（一九三八年〓昭和十三年に設立され、政府と民間の半々出資の東亜の諸問題だけでなく当時はヨーロッパの大戦にも目を向けていた調査・研究機関）に彼の三高・東大の一年先輩の小松春雄氏（現在、中央大学名誉教授）がおられることを教えてくれ、採用試験を受けに行き東亜研究所に入ることができた。その研究所は内閣直属の企画院の外郭団体で設立期間は十年とされていたが、アーノルド・J・トインビーがいたイギリスの王立国際問題研究所と並び称せられるものになって然るべきものと思われた。私は、山下汽船会社を去る時、保証人の伯父や父の立腹は当然だろうが、私たちの先祖の中に脱藩して学を求めたものがあることを思い出しでもらいたいと思った。

五

東亜研究所で与えられた仕事は先ず泰タイ国の經濟調査で、学問的に未開の分野で歴史的考察が必要なので大いに楽しんだが、東亜研究所の蔵書の中には東大や神戸商大の図書館にもなく読みたいと思っていた本が多くあり、どんな本を勤務時間中読んでいても咎められるどころか、語学の天才といわれ歴史に造詣の深い原幹二郎（退役海軍中将で戦艦陸奥の元艦長）第四部長が——私はよほどその部長に気に入られたようで——しばしば部長室に呼んで東西の歴史に就いて話しかけられたり、英米と戦えば必ず負けると言われ戦争回避のためにとるべき方策を

聞いかけてくださったり、『わが闘争』を読んだか、ヒトラーのような男の独裁下のドイツと同盟条約を結んだのは気違い沙汰、ドイツ軍はモスクワを攻略できないと言われたり、アメリカは事実上参戦しており、第一発はドイツに撃たせようとしていたが、もう日本に撃たせようとしている、日本が先に攻撃したらアメリカは恐るべき力を発揮するよと言われたりした（十一月二十六日のハルノートが伝えられた時にはハワイ作戦機動部隊が南千島のヒトカツ湾を出航していたことは知る由もなかった）——そして、他言を禁じられた。

一九四一年（昭和十六年）十二月八日に日本側からの武力行使によって大東亜戦争（前に述べたように、当時の公式の呼称を用いる。太平洋戦争は the Pacific War というアメリカ側からの呼び名である）が始まると、原部長はアメリカ軍がとってくる戦法を予言してくださった。そして、南方に調査要員が派遣されることになると、東亜研究所からは先ず戦略上から見てアメリカ軍の攻撃からもイギリス軍の攻撃からも最も安全で気候もいいジャワに派遣することにしてください、私に「生きて戦後を見られると思うし、ジャワを中心にした蘭領東印度（インドネシア）は君の将来の研究に必ず役に立つよ」と言ってくださったので、私は「将来の研究に役に立つ」と言われた意味もわかっていたので、「行かせてください」と言ったら「もうリストの中に入れてあるよ」と言われた。

この南方派遣要員は、東京商科大学（一橋大学の前身）の経済研究所からはシンガポール・マレイ半島に、満鉄（南滿州鉄道株式会社）調査部からはスマトラへ、太平洋協会からはフィリピンへ……と決められたのである。残念なことに、小松氏は、それより先、応召してビルマに行かれた。なお、ジャワに行く前に読んだもので特に印象に残っているものは、ジョン・F・ケネディというハーヴァード大学の学生が書いて偉大な歴史家になるだろうと注目を浴びたという *Why England Slept* という本で、その人こそ私の競争相手と思ったのである。

経済史を中心とした歴史の研究に志して五十有余年

經濟史を中心とした歴史の研究に志して五十有余年

インドネシアに行くことが「将来の研究のために役に立つ」というのはオランダの植民政策史の研究のためどころではなく——ジャワに立ってそこを眺めれば、原始社会から中世を経て近代の初期までの經濟の發達をタイム・トンネルに入らなくても地理的に實際に見ることができ、經濟發展の諸段階をただ見るだけでなく、經濟の發展の停滞の要因もその發展のための条件も考察することができるし、民族の自決・独立の条件をよく考えることもできるし、オランダの著名な經濟学者 J・H・ブーケ（ライデン大学教授）がインドネシアの經濟を「二元經濟」と捉え、その資本主義化は不可能かつ危険だと主張しているのは植民地主義者的な目で見たのではないかということも考察でき、権力と經濟の關係も、自然条件と經濟の關係も、宗教と資本主義の關係も考えることができ、「經濟史」の研究に大きく目を開かせてくれるはずということであった。更に、この戦争が「聖戦」と主張されるなら（支那事変と呼ばれていた日華事変がまぎれもなく戦争なのに「事変」と呼ばれたのはケロッグ・ブリアン条約違反と言われたくないためか、宣戦布告を行なう条件を政府が言えないためなのかと思っていたら、東亞を欧米諸國の帝國主義から解放し新秩序を樹立するための「聖戦」をいう言葉を押し付けられた）、本当にそのように「民族解放のための戦争」、「自由のための戦争」にするために一役買いたいという気持ちもあった。こうして、ジャワで死ななければならぬ時には、私は「道においては死をいとはず」と言って死ぬると思つた。

一九四二年（昭和十七年）十二月十八日に、私は見習士官待遇の軍属として（その一年一カ月後に中尉相当官の陸軍司政官に昇進したが）、東亞研究所々員を中心に編成されたジャワ派遣調査要員四十余名とともに大阪港から輸送船に乗り、途中シンガポールに寄り、ミッドウェイ海戦以後の日本軍の絶望的な戦い（特にガダルカナル島からの日本軍の敗退）に就いてかなり詳しく知り、こうなったからには日本がスイスのような中立国を通じてアメリカ

に和平を申し入れてもアメリカは容易なことでは聞きいれてくれないだろうし、アメリカが寛容な条件を示しても不敗を教えられている日本軍・日本国民は納得しないだろうと思いつながら、そこを宝の山と思つてイギリスの東印度会社に関するものを含むイギリス経済史関係の本を買い、大きな風呂敷に包んで背負い、これが日本軍従軍者かと我ながらおかしくなつた姿で翌年一月十八日にジャワのストラバヤに着き（シンガポールからの船が山下汽船の船だっただけでなく、それがいかに老朽船かとよく知っていたので、ぞつとしたが、私達をおろした翌日ニューギニアに向かい、直ぐにアメリカの潜水艦に撃沈されたさうである）、そこで一泊して汽車でジャカルタに向かつた。ジャカルタに着くと蘭領東印度の役人の恩給法その他（オランダ語）の翻訳の仕事が私を含む四人を待つていて、私はその中の一人の東京外国語学校（東京外語大学の前身）出身の同僚に助けてもらいながら一週間ほど殆ど不眠不休でその仕事に当たり（他の人たちは調査室と宿舎の整備をしていたようである）、ようやくその仕事を済ますと先ずまだ開いていたユダヤ人（と聞いたが）の古本屋に行つて本を買い、三、四日で有り金をはたいてしまつたが、次第に捨て値で売つてくれ、オランダ東印度会社の活動に関する資料その他の多くの貴重な文献を手に入れることができた。私が正式に与えられた仕事は先ず「敵軍」が上陸用舟艇を入れて来そうな港湾、河川の調査、続いて米の生産・供出の状況の調査（決して監督や強制には関与せず、農民保護の防壁になるよう努めたと胸を張つて言うことができる）、「原住民」を「皇軍」と「大日本帝国」の支持者にするための独立許容の約束が行なわれると「原住民」の「独立」意識の調査とインドネシア国旗をつくらせるよう配給された赤と白の布の普及の調査とその促進で、これ幸い！と思つてジャワとマドゥラのいたるところを歩きまわつた。そして、その間しばしば、私が歴史家としての競争相手と考えた（私より二歳年下の）ジョン・F・ケネディ君はどこでなにをしているのだろう、戦場で会いたくな

経済史を中心とした歴史の研究に志して五十有余年

經濟史を中心とした歴史の研究に志して五十有余年

いなと思ったが、その頃の私はまだよく彼の顔を知らなかった。

ジャワで、私は「マルク」「ミール」などと同類の「デッサ」を、原始的農業を、マルクス主義者たちが「アジアの生産様式」と呼んでいたようなものも、インドのカーストとは異質のものにしても類似点もある血統による身分階級制も、中世的社会も、植民地内で残存した「土侯国」も、華僑資本のたくましさ、アラブ資本の「ずぶとさも」、民族主義の抬頭も、資本主義の胎動も、ドイツ歴史学派の学者たちが述べたような經濟発展の諸段階も見ることができ——「生きている經濟史」「生きている歴史」を見ることができ、喜んで（一通り基礎知識を身につけてから見たので特にそうだったのだろうが、後に經濟史に理解を深めるのにどれほど役に立ったかわからない）——、マックス・ウェーバー、ルヨ・ブレンタノー、ウエルナー・ゾムバルト、リチャード・トーニ等々の学者が宗教と資本主義の關係に就いて論じていることに思いを馳せながら、東亜研究所でヨハネス・クラウス（当時上智大學教授と聞いたが）著『回教の經濟倫理』を読んで泰國の經濟の後進性と小乗仏教の關係を考えて宗教改革の意義に就いて書きたいと思ったことも念頭にあったため、植民地支配からの解放（独立）後のインドネシアの經濟の展發を妨げるであろう回教（マホメット教マホメット教）の經濟倫理を調べ、それを支えている慣習法（それに就いての老大な資料も買って持っていた）の研究もしたが、そして、例えば、軍政府（軍政監部）が軍票（不換紙幣）の發行によるインフレの抑制のため預金の利子での最後の生活の安定を喧伝して銀行への預金を勧説しても、日本の軍政とその支配下のジャワ銀行を信頼した人たちにも効果がなかったのは中世ヨーロッパのカトリック社会におけるように「利子付き貸借は罪惡」だったからであったし（アラブの金貸しの異民族あるいは他宗派のものに対する高利は可）、利潤を追求する營利事業や投資はもちろん罪惡であることを知ることができ——そのようなことは小乗

仏教の社会でも同様である——、ヨーロッパでの宗教改革に就いて考えているうちに「信教の自由」「市民的自由」に就いて考え、更に——前戦基地にいたから一そうであっただろうが——生と死に就いて深く考え、そして人間の性は善か悪かと考えるにいたり、受け入れられるべきだと思つたのは、中国から伝来の性善説・性悪説より、アメリカと戦っている日本軍従軍の日本人としては不謹慎と思われようと、アメリカ建国の父祖たちの思想であつた。即ち、アリグザンダ・ハミルトンが人間の性を「本来」悪と見、貧しい人たちはその悪に貪欲をむきだしにして騒擾を起こすものであるが有産者たちは教養を身に付けることができ貪欲を教養と財産でおおうことができて温和にふるまうことができるものであるが故に有産者階層による政治が行なわれるべきであると考え（念のため書いておくが、私は有産者たちがますます貪欲になるのを見ると彼等は本当の意味での教養がないのだと思うことにしている。なお彼は貧しい家の私生子で——コロンビア大学の前身のキングズ・カレッジで学び法律家になって有産階級入りしたが——彼は貪欲をそうしておおうた人物と見ていいと思う。彼は出身地の西印度のようにアメリカが再び植民地化されないよう、強力な中央政府の樹立を望み、金融業・商工業の発達に力を尽くしたアメリカ合衆国の初代財務長官である）、トマス・ジェファソンは人間の完全性を信じ、少数の有産者による政治ではなく、大地を耕し神に対して以外はだれにも頭を下げずにする卑屈な気持にならない独立不羈の精神を持った農民（彼はそのような自作農が多くなることを望んでいた）その他の一般の人々による政治を理想とし、血統とか財産の大きさによって決められる指導者による金権貴族主義的政治に反対し、おのずから現われ民衆が指導者と認めるようなものによる民主政治を希求し、そのようなおのずから現われる民主主義の指導者の出現を期待していた（そのためにヴァージニア大学の創立に力を尽くした。彼の墓石には——その時はこのことまで知らなかったが——彼がみずから書いた通り「アメリカ独立宣言、宗教の自由のためのヴァージニ

経済史を中心とした歴史の研究に志して五十有余年

經濟史を中心とした歴史の研究に志して五十有余年

ア法の起草者にしてヴァージニア大学の父、トマス・ジェファソンここに葬らる」と刻まれ、初代國務長官になったことはもちろん大統領になったことに触れてもいなかったと記憶している）のに対して、ジェイムズ・マディソンは人間は天使にもなり得るし悪魔にもなり得ると考えて（私もそう思う）、敢然とした三権分立主義と立法・行政・司法の三権の（だけではなく、立法部の中の上院と下院の権力に就いても）抑制と均衡の制度（checks and balances system）をアメリカ合衆国憲法の基底に据えさせたことを思い出し、アメリカ政治・經濟史に関する本も読みながら、この戦争がウッドロウ・ウィルソンが前の大戦中に主張したように「勝利なき平和」（日本人としてもはや虫がいいことだった）と「民族自決」（インドネシアその他の植民地の独立）で終結を見るように望んでいた。

私はインドネシア人の独立意識の昂揚に努めたが、ライデン大学で經濟学で学位を得たという極く親しくしていた人から極秘のものとして「十人の精鋭を植民地に送り込めば赤化できる、植民地の民族主義と共産主義を結び付けよ」というレーニンのコロニアル・テーゼに則した文書を見せてもらい、それを見ながら、貧困がはびこるところに共産主義は根付き広がりやすいということやインドネシア經濟の近代化（植民地的大農場經營の排除は勿論のこととしてオランダ人植民地官僚も手をつけて失敗したことがあり利用したとも見られた「デッサ」のインドネシア人自身による解体＝農地改革）、インドネシア人に自我に目覚めるようにさせるためだけでなく民族資本の育成のため中世的慣習法を改めさせるための宗教改革の必要などに就いて語りあい、二元經濟、二重社会と言われていることや熱帯經濟学に就いて論じあったりしたことも、インドネシア共和国の憲法は敢然たる三権分立主義だけでなく抑制と均衡の制度を採ったものであってほしいと言ってアメリカ合衆国憲法の解説をしてアメリカとの戦争を忘れたことも思い出さずにはいられない（この人は後にインドネシア政府の高官になり、私が手紙を出したら心暖まる返事

をくれたが、その後の政変で消息がわからなくなった。また、別の親しくしていたインドネシア人がジャワの古い予言書（詩の形になっていた）を見せてくれ、それで「陽を背負うた軍隊（日本軍）が来て白人（オランダ人）を追い払う」とわかっていたと言ったので、私は「では、この戦争はいつ終わる？」、「私たち日本人はいつ日本に帰れる？」、「インドネシアの将来は？」などと聞いたら、「これによると」と言って（古いジャワ語で書かれてあり、インドネシア語に訳してもらっても、またその言葉をどう解釈するかがむづかしかった。「陽を背負うた軍隊」なら日本軍とわかったが）、終戦の日も、日本軍の撤退の様子もびたりと当ててくれたことも忘れられない。インドネシアの将来に就いても聞くことができたが、私は歴史家なので「今までのことに就いてはよく当たっている」としかここに書けない。私はその予言書をインドネシア語に訳したものを持っていたが帰国の前に焼かなければならなかった。その完全な原文がどこに保存されているか聞いて来たが古いジャワ語で書かれているのでインドネシア語にしてもらわないと解読できない。また、大和民族の血の中に南方民族の血が濃く入っていることを知ることができた。私はインドネシア人が私を個人として信頼して話してくれたことは誰にも黙っていた。私は東部ジャワの米の供出状況の調査を命じられて出張して知ることができたことのうち黙っている方がいいと思ったこと（日本軍の要求に一〇〇％応じている地方の農民がなお自分たちの食糧や備蓄米を残しているようなこと）に触れずいたら（私の報告を聞くための高級将校たちの宴席に呼ばれたのだが）、「お前はなにか隠している。もっと米を出させられるんじゃないか。それでも日本人か。ぶった斬る」と佐官級の軍人に言われ、彼が軍刀をつかんで立ち上った時、私はむざむざ斬られるものかと思ひ（私は平服だったので刀を持っていなかった）、それに対処するため誰の軍刀を取

經濟史を中心とした歴史の研究に志して五十有余年

ろうかと目を配りながら、「日本人の名誉のため」と言ってもわかるような相手ではないと思い、「日本軍に対する原住民の信頼を裏切らないため」と言ったら、「原住民の信頼のためか」と言いながら仲に入ってくれた将校たちがいて、「帰れ！」と言われ、斬り死にしないですんだが、なん万かなん十万かのインドネシア人の食糧の安全を守っただけでなく日本人の名誉を守ったと誇ることがができる。

そんな陸軍司政官だったからだろうか、私はそれから間もなく一九四五年（昭和二十年）七月中旬に「近日中に召集するから出張するな」という命令を受け、軍政監部にいた五高・東京帝大の先輩の司政官に会いに行ったら「中尉相当官の陸軍司政官に召集とは考えられないが、ともかくなにか『長』という職に就いたら免除されるだろう」と言って、閉鎖されていたバンドン工科大学の図書館を施設研究所にし私をその副所長にする運動をしてくれ、私は三日後に発令を受けてバンドンに移った（所長は温厚な五十台の土木技師だった）。そこには蘭印副総督が集めたというオランダの植民地経営に関する資料やその他私が興味を持つ本が多数あり、利水を中心にジャワの農村経済社会の研究を公務にすることができ、あの不届な軍人に会わずにすむことができると喜んだが、同じ旅団管内にあったため（とあとでわかったが）、八月十日すぎ、「八月十六日に入営」せよという召集令状を受取った。私は内閣総理大臣によって任命された司政官を南方派遣軍のジャワの軍司令部が一兵卒にするとはなにごとか、指揮命令系統はどうなっているのかと思ひながら入営の準備もしないで八月十五日を迎え、その昼すぎ「さて、どうする」と考えていたら、「日本は負けたらしい。日本人はみんな泣いているよ」とインドネシア人が教えてくれた。私は「終戦の詔勅」が放送されたのだから召集されても直ぐ帰されるだろうと思ひながら、翌日集合場所に行ったら、直ぐにトラックに乗せられ、兵営に連れて行かれた。営庭で身体検査をした軍医が私に

「帰してあげることできるが、二、三日と思うから我慢して、日本軍をよく見ておくことを勧めるよ。最後の機会だろうから」と小さな声で言ってくれたので、「見たくないから帰してください」と言えず、見てやろうと思つてうなづいた。二千人余り召集されたものうち司政官は僅か三名(三名とも東亜研究所から派遣されたもの)、大卒卒業者は私のほか一名(台北帝大出身)だったそうである。私は兵舎に入れられ、恐怖制の下におかれていた時、部隊長室に呼び出され「貴官は外交史、国際法を知っているか」と聞かれ、知っているなら前大戦でドイツが降伏してから講和条約が結ばれるまでのこと、戦時中どんなことをしたら罰せられるか、どんなことをしていたらどんな罪になるかということ、捕虜はどう扱われるか等々に就いて教えてほしい、あすから始めてほしいと言われ、快諾して兵舎に帰ると「鬼よりこわい」班長の隣りにマットが五つか六つ重ねてあり、毛布も二、三枚くれて、その上で寝るよう言われ、これじゃ牢名主と思つてひたすら辞退し、ようやくマットを三つにしてもらった。翌朝から、私は外交史・国際法の講義を始めたが(受講者は私より官等の高い将校たちだった)、ヘーグの陸戦条規を知らないのが(第一次大戦中、戦時国際法を無視したと非難されたドイツ軍兵士でも、その要約を読まされていたと聞いていたのに)、私の講義の受講者たちはそれに違反するようなことはしていないと推察することができ、安心した。そして、三食とも御馳走せぬ、私はよく記憶していることを主観を交えず、「ウェーバー先生、大学ででなくてもちゃんとやっていますよ」と思いつながら、極めてまじめな顔をして聴いている受講者の前で講義を進め——三十歳になろうとしていた時初めて教える側に立ったのだから印象深い(もっと早く陸大の教授にしてくれればよかったのに!)——質問を受けても気楽に答えておいた。

ジャワ派遣軍は無傷だから独力で戦うという意見に対して、それは国際法上の問題より日本軍の最高司令官

経済史を中心とした歴史の研究に志して五十有余年

經濟史を中心とした歴史の研究に志して五十有余年

大元帥（天皇）の命令を無視することではないかと思ひながら、私は「国際法違反です」と答えたが、それだけは私見であった。そして、私が「休戦IIアーミスティック以後の新兵の召集と戦闘訓練は違法です」と言った三日目の講義の時にジャワに勅使が来てくれたそうで、召集された新兵たちは「戦争は終わった。お前たちの召集はなかったことにする。英・蘭・米軍に知れたら困ることになる」と告げられ、解散させられた。

宿舎（官舎）に帰った翌日、私はバンドンの西部ジャワ防衛隊（旅団）司令部に呼ばれ、和文英訳やオランダ語の和訳、インドネシア語の英訳などを命じられ（ロンドン、ニューヨークなどに行ったことがある商社マンたちは英語の通訳ならできると言ったそうである）、ジャワに上陸したイギリス軍がまだ武装を解除されていないかった西部防衛隊がいるバンドンを安全な場所と見て司令部を移して来たので、全ジャワの情報（イギリス軍の命令で？）収集していた西部防衛隊が得た情報を私が英訳することにもなり（ジャカルタには陸軍教授という英語の達者なのがいなくては、停戦後は日本人の移動が禁止されたので来てもらえず、助手を付けてくれたが、一人は早稲田大学英文科出身の歴戦の軍曹で「戦地に九年間いたので英語は忘れた」と言って戦友や部下がいる部隊に帰りがっていたし、もう一人連れて来てもらったら私の大学の先輩でも「ドイツに留学して英語は忘れた」と言い、二人で軍需物資のリストの英訳をしてくれただけ。タイピスト嬢は夜が更けると望郷の念に駆られて泣く）、イギリス軍、オランダ軍からの書簡（それらの英文なら邦訳できる大学出の将校がいた）を見せてもらえず、その返事を軍隊用語で書いたものを英訳しなければならなかったり、英訳を頼まれたものの意味がわからず説明を求めると、わざと曖昧にしたので適当に訳しておいてほしいと言われたりして困ったが、全ジャワ在留の日本人の帰還のための交渉文も、高温多湿の無人のガラシ島とかに集結させられずに帰国できるようにする嘆願文も（直訳すればイギリス人にはわかってもらえないと思えば思いき

て言葉を補い)、前線から敗退の将兵を含むジャワ在留のなん万もの日本人の運命が私の英作文の力にかかっていると思いながら英訳した。その頃、夜になるとオランダ軍かイギリス軍がインドネシア独立軍を威嚇する迫撃砲の砲弾が屋根の上を飛ぶ音を聞いていた。オックスフォード大学とケンブリッジ大学の卒業生というイギリス軍将校が会いに来て、私の英語を大変ほめてくれ(五高で河瀬教授から『春琴抄』その他の日本の文学書の英訳で鍛えられ、マター講師からオックスフォード英語を伝授され、五高生・東大生時代にロンドン・タイムズを愛読していたので当然)、「平和になったらまた会いたい」と言ってくれた方が——それで「無事日本に帰れる」と思い——、側にいた高級参謀から「貴官こそ真の愛国者」と言われたことより嬉しかった。私は敗戦後は愛国者かと苦笑したが、愛国者といえば、私は日本に帰ってから三、四年後、日比谷公園近くの路上で元將軍・旅団長に出会った時「あの時は御苦労かけた。貴官こそ真の愛国者と思ったよ、これからの日本のことを頼みます」と言われたことも思い出す。そのことはともかく、私は「インドネシア独立のための戦い」を見たと言っていると思う。また、私は、インドネシア国軍がどのようにして生まれることになったか、「独立」軍が日本軍なきあとオランダ軍と戦うための武器・弾薬をいかにしてたやすく入手できたかということも知ることができた。

ここでどうしても書いておきたいことがある。中部ジャワで、木造船などを造るために徴用されて来ていた日本人軍属二、三十人が共産ゲリラに捕えられ、刑務所に放り込まれて機関銃で全員殺された時、自分たちの血で「インドネシアの独立を祈る」とインドネシア語や日本語で壁に書いたという情報を受け、私はそのことを涙を流しながら英文にした。そのことがどのようなルートを経て伝えられたか知らないが、スカルノ(インドネシア初代大統領)は以後「日本人に危害を加えたものは厳罰に処す」と命じたと聞き、そのことだけでも歴史がつく

経済史を中心とした歴史の研究に志して五十有余年

られる過程を見た気がした。それより先、私も路上で数名の暴徒に囲まれ連行されかけ、軍装していたので愛刀（関の孫六系の刀）で拳銃をはねとばし他の拳銃の銃声を聞きながら竹槍を二、三本叩き落として難を免れたこともあり（刀に傷をつけたが一人も傷つかなかったと付記しておく）、翻訳の仕事の合間に深夜シャワーを浴びていた時狙撃され、目の前の壁に弾痕と大きな亀裂を見たこともあった。私は、歴史を浅薄な知識で見てもならないと自戒しながら、軽薄な自称歴史家や評論家が断片的になにごとかを取りあげて論じるのを見たり聞いたりすると吐き気をもよおす。

私は翻訳の仕事を七カ月余り殆ど不眠不休（眠ったとしても平均一日に三、四時間程度）で続けていたところ、前記の軍医（東京帝大医学部卒業）が突然私の部屋に来て「まだ大丈夫です」と言った私に「もういいんだよ。よくやってくれた」と言ってくれて私を近くの療養所に入れてくれた。私は、二日間食べもせず眠り続け、看護婦にゆり起こされると「伝染病でなくひとりですけるものは日本に帰してもらえそうですからトラックに乗ってください」と言われ、まだよく目が覚めないうちに脚氣と記入した病床日誌を渡されてトラックに乗ると、顔見知りの下士官が私の衣類、日用品、財布などを入れたリュックサックを持って来てくれて……、転々と仮設収容所に移されているうちに常時の健康状態になり——その間に、崩れかけている山間の僻村の道路を石や土で補強してくれていた一人の老婆が私たちを乗せたトラックが通ったとき手を合わせて深々と頭を下げてくれたことや機関銃を持ったインドネシア青年が「テリマカシ」と手を振ってくれたことを思い出さずにはいられない——、ジャカルタに着くと、ジャワから日本に送還されるものための早期の船に乗ることができた。

その船は蚕棚のようなところに体を横たえることも容易でないほど多数の軍人（前線からの撤退将兵が多かった）、

軍属、一般邦人を乗せて出航したが、その翌日、私は輸送責任者というべき人から呼ばれ「兵・下士官たちは將校をもう上官ではないと言って反抗する。事ごとに『貴様きさまのような奴がいたから負けたんだ』と言い争っているものもあるし、船員だけがいいものをたらふく食っているという不満の声が起こっている。貴官は中尉相当官だが文官だし、胆のすわった人物と聞いている。代わって指揮をとってくれないか。武士の子孫と見たので頼む」と言われ、即座に引き受け「三千人の長」になり、豪の者こそ選ばれるという敗軍の将になった気分です。昼夜をわかつた船内を駆けまわり、私を見ると挙手の礼をするものも続々と現われ、これで全員無事に帰国できると思っっているうちに名古屋港に着き、従軍解除になって一息つくと中国・九州方面に帰るものの面倒めんどうを下関まででいいから見てほしいと言われ（下車駅が記入されておらず帰り着くまで汽車に乗ることが出来る乗車券をもらったが）、先ず「東京へ」と言えなくなり、一九四六年（昭和二十一年）五月十日に父母がいるはずの熊本に着いた。

六

家は戦災に遭って家が合った所は土だけになっており、私が途方に暮れてその近くを歩いた時、顔見知りの人に会い、妹は焼夷弾の直撃を受けて死んだが父母と末弟は近郊に疎開していると知った。

私は父母の疎開先に着いて（私が手にすることができた私のものは大学の卒業証書だけだった）、東亜研究所が一月半近く前に解散したことを知ったが、体を休める間もなく（父母・末弟の疎開先は私が体を休めるのにも狭すぎた）上京して東亜研究所があった建物ビルに行ってみた。そこには「政治経済研究所」という看板が掛っかけていても、その建物だけでもなつかしく、中に入って顔に見覚えのある人たちを見て声をかけたら「帝国主義戦争に加担したもの

経済史を中心とした歴史の研究に志して五十有余年

經濟史を中心とした歴史の研究に志して五十有余年

には用はない」と言われ、その言葉と中の雰囲気からそこは共産主義者たちの手中にあると察しがついたが、東亜研究所での友人・知人の消息・住所をいくらたずねても教えてくれず（東京にいるだけか一人の住所か勤め先を教えなくてもよかったではないか）、共産主義者の非人間性をよく知ることができた。東京の様相は一変しており、友人・知人の家をさがしているうちに疲れ果て、私は飲まず食わずの状態で、国鉄の駅で夜明したこともあり、このままでは行倒れになると思つて再起を図ることにし、涙をのんで熊本に戻るよりほかなかった。そうしても、ぼろぼろになった従軍服を着て歩けば（私がつけて帰ることができた服は背広一着だけ）、「お前たちが帰つて来たからよけい食糧が足りなくなつた」という声を浴びせられたことがしばしばあつたが、もしアメリカ軍が横浜・厚木に入つて来るのと同時に、ソ連軍が北方から入つて南下して来ていたら更に朝鮮から山陰・山陽地方に侵入していたら、日本はどのように分断されていたかわからなかつたと思わざるを得ず、更に敗戦国に対するアメリカの占領政策——批判すべきことはあるにしても——の寛容さに感謝しなければならぬと思う。

私は熊本で五高を訪ねたところ前記の樋口教授が大蔵省熊本財務局の局長に紹介してくださいと、そこで囑託として大蔵省への管内（当時は沖繩を除く九州全県）の經濟事情に就いての報告書を作成することと進駐軍への文書の英訳の仕事をする事ができることになつた。こうして、私は戦後の祖国での生活を——ジャワにいた間に東亜研究所から送られていた給料も解散手当（退職金）も末弟の学資に当ててもらえれば幸いと思つて受取らず——殆ど無一物から始めることができ、そこで働いた約一年間に（その職員寮に入れてもらうことができた）、ジャワにいた間の日本の新聞・雑誌を、後に同じ時期のアメリカのそれらと対照してみようと思ひながら丹念に読んだが、イギリス英語の書き方からアメリカ英語の書き方への転換をはかることもできた。また、樋口教授がス

ミス、リカード、マルサス等々の著書から抜粋したものに注釈を付けた本をつくるのを手伝わせてくださったことや経済学に関する図書を貸して下さったことも嬉しかった。

翌年六月に参議院調査部に職を得、そこを衆議院調査部の中になん人も入っていた旧東亜研究所々員のなつかしい顔を見ることができた。その両調査部のメンバーを中心にして現在の国立国会図書館の調査及び立法考査局がつくられることになったのであるが、参議院調査部での私の主な仕事は水産業関係の問題（当時日本で水産業は非常に重要な産業であった）に就いての参議院議員からの質問に応じられるよう準備しておくことと英文で書かれたものが持ちこまれば邦訳、またしばしば英作文であったが、東亜研究所にいた時と同じほどではなくても、議事堂内の図書室から本や後の研究に役立つと思うような資料を借りて読むことができた。そして、東京医科大学の前身の専門学校で教養の経済学を（経済史を中心に）講じることができたことになった——そのことは本務に支障になかったのに課長（「教職追放」になった元二高教授）からやめるよう言われて半年でやめなければならなかった——が、昭和二十三年四月に国立国会図書館が創設され、両議院の調査部の他の全員が移って行ったのに、私とその課長の二人だけがその国会分館勤務にされ議事堂内に残された。この二人だけが同じ大学の同じ学部の出身者だったのだが、課長に就いては別として、私が「天皇を国の象徴で日本国民統合の象徴とした日本国憲法が国の最高行政機関の長官を大日本帝国憲法のままの言葉の大臣としたのは奇妙」と言ったためかも知れないと思った。参議院調査部には法律の知識があるものは私一人しかいなかったもので、議員（緑風会）から意見を求められ、私は前から考えていたようにそう答えた（国会を国権の最高機関として議院内閣制を採用抑制と均衡の制度を導入しなかったことに不満とまでは言わなかった）が、課長は私が憲法を批判したのを心配していた。私は「民主

経済史を中心とした歴史の研究に志して五十有余年

経済史を中心とした歴史の研究に志して五十有余年

主義者として批判は自由でしょう」と言ったが、課長に「調査部員としてはどうか」と言われた。

こうした機会に、私はアメリカのカリオワ基金でアメリカに留学したいと思いましたが、いかにアメリカという国が好きだったにしても、すっかり卑屈になってしまった日本人を見るにつけ、「周の粟は食まず」（伯夷・叔斉）という気持から応募する気になれず悶々としていた時、法務庁（現在の法務省の前身）に東京帝大の高名な民事訴訟法の教授を長官にした新しい部局がつくられることになり、法学部出身者を主力メンバーにすることにされたが経済学部出身者も加えることにしたので加わらないかという話を受け、私は適した仕事と言われて、同年六月に法務庁事務官（後に法務府事務官）になってしまった。私に配属された課でまた読みたい本や資料を見ることができしたが、主な仕事は戦時中を中心にして戦前、戦後に発行された法律・政治・国際関係・経済に関する図書や雑誌（の特に研究論文）の内容を簡潔に英文で書き、アメリカのおよそ十の主要大学に送り、それらの大学から法律関係の学術誌その他の資料の寄贈を受ける手段を講じるということであった。私は政治・国際関係・経済に関する文献の紹介は苦勞しなかったが、法律の中でも特に訴訟法関係のものの内容を紹介しアメリカ語で書くのには難渋した。私の直接の上司の課長は私より十歳ぐらい年上で、東京帝大法学部助手、陸軍法務官の経歴を持ち中国で敗戦後ソ連に抑留された人で、ソ連に抑留中に、『ソ連共産党史』を邦訳したと誇っていたので、私は「なんのために？」と思いつながら、「ソ連の対日宣戦布告と攻撃は日ソ中立条約（不延長の通告後一年間は有効）に違反しており（「火事泥」とまでは言わなかったが）、ソ連の日本人抑留は人道に反するとソ連攻撃を始め、ロシヤ・ソ連の歴史、マルクスレーニンスターリン批判で対抗してから（そのためにはまた多くの本を読んだ）すっかり機嫌を悪くさせてしまった。また、私は彼が国際法とくに戦時国際法に無知なことを見抜いていた。その人がニ

コライ室内で開かれていたロシア語講習会の高等科に通うのに誘われて、私は初等科に通い、あとは独学ということにしてソ連映画「イワン雷帝」を見て、なんとか聞きとれるようになったが、私は人間としての暖かさが感じられない、独善的で、共産主義を礼賛する課長の顔を見るのもいやになってしまった。

その頃、元東亜研究所々員でジャワで上司だった井上謙二氏（後に中京大学の統計学の教授、今は故人）から戦時中東京帝大の統計学の教授をしておられた東洋大学経済学部長の中川友長教授（成城大学の経済学部長になられた後、中央大学に移られ……今は故人）に紹介され、中川教授から機会を見て東洋大学に呼んであげようと言われ、私は或る研究機関から誘いを受けたのを断わって東洋大学に呼ばれるのを待っていたところ、中川教授から成城学園に大学が設置される計画があり、その経済学部長になるはずなので、私を「欧米経済史」の専任講師として申請することにしたと言われ、これほど幸いなことはないと喜んだ。「西洋経済史」でもよかったが、「欧米」と「米」が入っていたので、いよいよ私の本領が発揮できると喜んだのである。

それからの私はいともんびりした気持ちになっていたが、仕事上のことで横浜の米軍キャンプに行く機会があり、その図書館（かまほこ型だったが）に行ってみて、日本軍の占領部隊内だったら想像さえできない政治学、経済学、歴史、法律等々の高級な本が多数あったのに感嘆した。そして、後に進駐軍が引揚げる時、それらの本を廃棄処分しようとしているのを知り、私は成城大学の図書委員として、「私たちの大学にいただけませんか」と交渉し、池田 勉図書館長と、私より遙かにアメリカ語が堪能な英語・英会話担当の山内不二吉教授、図書館の人たちを案内して横浜の米軍キャンプに行き、なん千冊ももらい、そのうちの重要な多くのものが今も成城大学図書館の中にあるはずである。

経済史を中心とした歴史の研究に志して五十有余年

ともかく、私が法律学に関する専門書や研究論文の内容の英訳に苦心しているのを見たり（日本語で書かれた政治・経済・法律学に関するそれらのものの内容を一人で楽々アメリカ語で書けるものがいたらお目にかかりたい）、私が表面おとなしそうしていても「気性は強く」筋金入りの自由主義的民主主義者で共産主義を否認しもの、考え方が根本的に違うことを腹立たしそうにしていた課長は、課内でつくられていたガリ版刷りの「文集」に私がジャワで前記のインドネシア人の経済学者夫妻から聞いた靈魂の不滅を信じたくなるような話を書いた（私はそれ以前にもそれ以後にもそれ以上に靈魂の不滅を信じたくなるようなことを体験しており、岡山にある菩提寺の住職に話したところ、それは仏道に通じることであると言われ、私の体験の一部をその名刺の刊行物に連載した。私はそのようなことはただまだ科学的に解明されないだけだと思っている。それが立証され、靈界の方々と会話ができる機械が発明され、いろいろな質問がきたら便利だと思っているが、アメリカの大学にはその科学的解明と取り組んでいる学者がなん人もいると聞いている）のを見てから、私が言うこともおかしいと言っていたそうであるが、私は欠勤したこともなかったのに突然「疲れているようだから、よく知っている病院の医者に連絡をとっておいなので、その病院に行って診てもらえ」と言われた。私は疲労回復薬でももらえるのだろうかとのんびりした気持で（その頃はビタミン剤など容易には手に入らなかった）、課長補佐（法務府に改組されるまで私が兼務していた）の若い検事に案内されて病院に行き、受付けにも寄らずに連れて行かれた診察室で、待たされもせず、医者の中の椅子に腰をおろすと、医者は私に「いま一番気にかかっていることはなんですか」と聞いたので、私は「イギリスのあしたの天気です」と答えた。私は医者をかからかうつもりなど毛頭なく、少し気をゆるめると、歴史と歴史をつくらうとしていることを考えるものになってしまったので（今ではますますそのようなものになっているが）、その時の時差を考慮に入れて「あした」（一九五〇年二月二

十三日)行なわれるイギリスの総選挙のことを考え、接戦と予想した労働党と保守党の勝敗を別つもの(そして、重要産業の国有化が進められるか改められることになるか)はその日の天気と考えていたからであるが、私はそう答えて「ここに病院だった」とう、かつ、さに気づいた時、医者には「やっばり」と言つて、私の肩越しに私の背後に目を向けた。それと同時に私は身をおかすこともできないうちに背後と両側から数人のものに襲われ、診察室から(その入口の上に「精神科」という看板があつたのをその時に見た)、別室に引きずられて行き、「電気ショック治療」をと、いう声を聞くと同時にベッドに縛り付けられ、麻酔薬を注射された。私は全身麻酔から覚めて少し頭がはつきりしてから、課長がその医者にどんなことを言つたか、その医者もただ一言(ひとこと)たずねただけでそのような処置をするとは医者と言へるかと思ひ、怒りが込みあげ、その医者をさがして病院の廊下をふらふらしながら歩きまわつたが、追いかけて来た三、四人の看護婦を殴り倒そうとした時ここで暴れて捕まったら精神病棟に入れられると思つて出口をさがし、直ぐに近くの国電の駅に向うのは危険と思つて先ず別の方向に向い、暫く身を隠したのち駅の反対側の入口から入つて電車に乗り、婚約者の従兄の家にとり着き、事の次第を話し異変の際は直ぐ婚約者の父に知らせてくれるよう頼み、全身綿のような疲れのため寝込んでしまつた。

私はソ連で共産主義に対して或いは政府に対して批判めいたことを言えば精神病者と見做されるということを聞くたびにその時のことを思い出し、イギリス労働党を支持する学者たちが彼等の主義は「資本主義に対する」社会主義(としても重要産業の国有化という程度のもの)に「独裁主義に対する」民主主義をあわせたものであるが、いわゆる共産主義国の体制は「資本主義に対する」社会主義に「民主主義に対する」独裁主義をあわせたものと定義すると言つた言葉を至言と思ひ、ますますあらゆる形の独裁主義と戦おうというものになつた。共産主義国の体制

経済史を中心とした歴史の研究に志して五十有余年

はなぜそのように独裁主義を採らなければならないか考えてみるべきではないか。私はロナルド・レーガン（念のため断わっておくが彼が言う言葉はすべて正しいと言うのではない）が一九八一年一月にアメリカ合衆国大統領に就任して初めての記者会見の時にソ連に就いて言った言葉は歴史家として私が先に言いたかった言葉だったので、それを力強く立証するための史料を集めてきており、ようやくそれに就いての研究論文の序章を書いたところであり、それを書きあげれば日米両国の絆を強めるのに役立つと思う。

そのことはさておき、私は理由もなく電気ショックを与えた医師にその準備をさせるようにした課長を人権侵害として告訴し、彼とあの検事と法廷で争おうと思ったが、診察券も受取っておらず、カルテらしいものも見なかったし、支払いもなかったし、「課長はその病院の法律顧問をしたことがあると言っていたことを思い出し」病院の関係者たちが口裏を合わせて「そのようなものは来なかったし、そのような事実はない」と言ったら証人はいいし、私に法務庁に移るよう勧めてくれた人に相談したら「事を荒だてるな」と言われて一そう腹を立て、ともかくあの検事からだけでも口述書をとっておこうと思ったが検事も課長も彼等の部屋におらず（私は病院でのことは口にしなかったが、私が課長を告訴すると言ったことを課長に通報したスパイが隣にいたことを間もなく知った）、私はその道の専門家に頼んで看護婦からでも証拠になることを聞き出してもらおうことを考えたり、五高の同級生で京都帝大を卒業した検事（現在は弁護士）に京都帝大卒業の弁護士を紹介してもらい誰からも圧力を受けずに戦おうといつでも投函できるように手紙を書いたり、最後の手段としてアメリカ人（もう知人がいた）の力を借りようと準備したりしているうちに、そのような闘争をしようとしているものは成城大学に採用しないとわれはしないかと恐れるようになり（成城大学に移れることになっていなかったら、知人がいた新聞社に入れてもらって闘争の火ぶたを切

ったと思うが、あと一カ月と少し、あと三週間、あと二週間と思いながら煮えたぎる怒りを抑えながら、黙々と仕事を続けていた。その間、課長も検事も私の前に姿を見せなかったことは幸いであった。彼等が逃口上でも言ったら素手で得意の居合いの腕を見せることになったと思う。

しかし、その間に驚いたことが二件あった。その一つは、私の仕事の助手をしていて私たちと一緒に課長を「独裁者」と言ったり、「彼はコミュニケーションよ」と言っていた女史が突然「近く課長と結婚する」と言ったことであり、私と同じ部屋の課員は全員顔面蒼白になった。それでは、すべてのことが課長に通報されていたはずだ。もう一つは、その数日後、古参事務官から「課長は或る大学の教授になるために退職する」と聞き、「或る大学」とは成城大学ではないかと思つたことである。私はそれが成城大学でないかとわかつて胸をなでおろし、書いておいた退職願を局長に出しに行き、そのことをその古参事務官に告げ、残務整理を始めた。

私は成城大学に移ってから間もなく非常勤講師の浦本三嗣〔医学〕博士が五高の大先輩とわかり、電気ショックのことを話したら、「ただ一言で診断する医者の方が異常。電気ショックは心臓その他の内臓の検査をしてからでなければ危険……その病院に親しい知人がいるので調べてもらつてその医者にすべてを言わせてあげよう。その元課長を人権侵害として訴えるのなら力になってあげる」と言われ——私はその元課長の氏名も所属大学名もはっきり告げていたが——、「後遺症がなければいいが」と言われた時、私はあの時以来時折胃の中に堅い箱が入つたような激痛が起こつていたことを忘れてしまつて、私はこれで勝つと思つと同時に、私が怒つたらどれほど恐ろしいかということを知らせるべきかと思いましたが、彼に対して憐みの情が起こり、浦本氏に彼もようやく大学教授になつたのだからその職を維持させてやろう、彼の将来の運命は私の掌中にあることになつたし、

経済史を中心とした歴史の研究に志して五十有余年

法律の勉強をさせてくれたしロシヤ語の勉強もさせてくれたと思えばいい、ソ連のことも勉強できた、それらのことは将来の私の研究に役に立つ、役に立たせなければならぬ、私は人間性に欠けた視野の狭い独断的な研究者になりたくない、綿密に問題を考察して「誤診しないよう」常に心がけ、あらゆる努力をして研鑽を積み、大型の歴史家になりたいという気持を一そう強くしたし、できたばかりの成城大学を変なことで有名にしては悪いと思うと言ったら、その五高の大先輩は「さすが五高の後輩、氣宇廣大、五高の卒業生とくに文科の卒業生はいいね」と言ってくれた。私はその人の熊本訛を聞いてから、「嫌な思い出がある」熊本弁をなつかしく思うようになってしまった。なお、浦本氏はあの病院の知人を通じてあの精神科医に第三者から聞いたことだけで誤診して軽率な処置をしないようよく注意しておいてくれたそうである。

七一(一)

一九五〇年(昭和二十五年)四月、成城大学が創設され、私は大学卒業の十年後によくマックス・ウェーバーのいう「僥倖」を得て、大学教師(専任講師)になることができた。その時は知らなかったが、私が東亜研究所にいた時から良き競争相手と考えていたジョン・F・ケネディ(当時は合衆国下院議員)——彼は大統領になっても「すべての政治家は歴史家でなければならぬ」と言った——が後に(一九六三年六月に)『平和の戦略』(“The Strategy of Peace”)と題してアメリカン大学で行なった演説の中で引用することになるイギリスの桂冠詩人ジョン・メイスフィールドがイギリスの大学への賛辞の中で述べた言葉、「この地上に大学ほど美しいところはほとんどない。……『それは』無知を憎む人々が知ることに努め、真理を知っている人々が他の人々の目を開か

せようと努力するところ」であるからであるという言葉をその時から知っていたような気がする。その詩人の名は早くから知っていたので、前になにかの本の中で読んだのかも知れない。いずれにせよ、私は大学をそのようなものとして見、そうであるが故に大学を美しいものと感じていたのであり、私を迎えてくれた未 completion と言ったよかった成城大学を美しいもの、美しいものの中でも最も美しいものにしたと思うと同時に、「真理を知っている」とうぬぼれていなかった（今でもそうである）私は、そのための基礎はなんとか固めてきたと思いつながら、先ず「真理を知る」ために最善の努力をしなければならぬと決意を新たにされた。

なお、先に引用したケネディの「すべての政治家は歴史家でなければならぬ」という言葉とジョン・メイナード・ケインズの「すべての政治家は経済学者でなければならぬ」という言葉を合わせると、「すべての政治家は経済史家でなければならぬ」ということになるが、私が「経済史を中心とした歴史の研究」者になるうとして研究に努めてきていたことはこれまで述べた通りであり、欧米経済史を講じることができるようになっても、特に政治家を養成しようと思つたことはなく、また私がプリンストン大学の経済学・政治史の元教授のウッドロウ・ウィルソンにどれほど親しみを感じようと思つたように（プリンストン大学の前身のカレッジ・オヴ・ニュージャージーを卒業した後ヴァージニア大学の法律専攻科で学んだ彼は自分のような高潔な人間は政界の階段を昇ることができないと見て弁護士をやめ政界に清風を送ることができるようになるように大学教授になりたいと思つてジョンズ・ホプキンス大学の大学院に入ることにするまでは政治家とくに合衆国上院議員になりたかつたそうであるが）私自身政治家になりたいと思つたことはなかつた。私が特にそのようなケネディの言葉を引用したのは、私が最初の著書（『アメリカ経済社会の形成』）を書いた時に彼は上院議員になつて満二年を迎えようとしていたので、私は新しい競争手をさがしながら、後に述べる

経済史を中心とした歴史の研究に志して五十有余年

経済史を中心とした歴史の研究に志して五十有余年

ように、成城大学『経済研究』に六つの研究論文のほか、国学院大学『政経論叢』に一つ、東洋大学『経済学論集』に二つの研究論文を書いたのに続いて二冊目の著書（『アメリカ経済史』）を書いていた時、彼の *Profiles in Courage*（翌年、歴史部門でピューリッツァ賞受賞）の出版を知り、大急ぎで注文して手に入れて読んで、彼はやはり歴史家だと思ったことを忘れることができないでいるからである。

私は成城大学に職を得てから二カ月後、私が参議院調査部に在職中調査部と関係が深い部署にいたので知ることになった富士木昌子——東京女子大学に在学中に健康を害し休学して、上海の東亜同文書院を卒業して日中の相互理解と友好のために尽した経験と中国語の才を認められて北京に在住していた父のもとに行き中国の古典を学んでいたため、現在も中国の古典が好きで特に唐・宋時代の詩を好み毎夜読んでいる——と結婚した。婚約してから知ったが、私の妻の父方の三代前は薩摩の太守〓島津氏〔そして父の祖母の父は肥前唐津藩士〕で、幕藩体制時代なら結婚するのに大きな障壁があったはずなので、ふたりは日本の歴史に大きな関心を持ちながら、そして島津氏の始祖・忠久は源頼朝の庶子という説が正しければふたりはともに清和源氏と言いあいながら、ふたりは戦争ですべての物的財産を失ったことも共通で、「世が世であれば」という言葉は禁句として、あらゆる職掌の世襲制に反対し、私がアメリカの独立宣言と建国の父祖たちの理想を説いても妻は完全に納得してくれない。ただ、私が自由主義的・合理主義的民主主義者なのでアメリカ政治経済史に限り興味を感じアメリカ人の気持になることもできながら外国人として冷静に客観的に考察できると言えば、妻は「合理主義者と自称しながら、夜ふかしばかりして食はず、『学問に』発憤しては食を忘れ」はいいけれど、そんな非健康的な生活をしていて合理主義者と言えますか」と言うが、「私も学問で生きたかったのに家事に専念することにしたので、私の分ま

で学問で生きてほしい」と言う。私は成城大学に職を得ることができたために、そのようなひとと初めて会ってから約二十年十カ月後（昭和二十五年六月一日）にようやく結婚することもでき、自分の道を邁進することができるようになった次第である。

ここで、私が右に書いた物的財産という言葉に点を付し物的に注意を促したことに就いて書かなければならない。「財産」という言葉の語源が後漢書『齊武王纘伝』にある「財貨と資産」と知っていても、また日本の法學・経済学で用いられる場合の意味も知っていても、それは米・英語の“property”に当たるものであると考え、その“property”という語の意味するものは何かと調べれば「所有するもの」であり、「所有するもの」で最も大切なものは何かと問われれば「生命、自由、および人間としてのその他権利」と答えることができるだろう。そしてアメリカ独立革命（アメリカ独立戦争）は何を目的としたかと史書・史料を見れば、先ず“property”を擁護するためとわかる。その“property”を分解すれば「アメリカ独立宣言」文の中のだれでも知っている言葉になる。それらが、それらこそ、われわれの、だれにも侵害されたくない“property”即ち「財産」であり、そしてそれを守るために生命を賭して戦うべきか、「我に自由を与えよ、然らずんば死を与えよ」と言わなければならぬかという切迫した事態に直面した時は別として、それらを守るためには「財貨・資産」が必要であり、そのためにこそ「財貨・資産」は“property”の中に加えられることができたのである。それらがなければ「生命」を維持するために魂も身も即ち「自由と幸福の追求」の権利も売らなければならぬだろう（私は絶対売るつもりはないが）、そしてそれ以上多くの個人「財産」はと問われるなら私が書いたものと私の生き方をとくと見ていただきたい。ともかく、私はアメリカ独立革命の胎動期、いわゆる「フレイト・ストロウ・ブレイク静かな革命」期に「英領」アメリカ〔植民地〕

經濟史を中心とした歴史の研究に志して五十有余年

の賢人たちは植民地人の自由と権利のために課税権の獲得による植民地の自治の拡大を英本国に働きかけたものと見た。しかし、“property”という言葉が一般にいわれる財産^Ⅱ物的財産の方に重点をおいて用いられてきていたので、「生命」を賭しても「自由」と「財産」を守るために、アメリカ植民地人は本国に反旗を翻したと見るべきだろう。そのために、私は物的財産と書いたのである。

“property”という言葉一つ取りあげてもそうでなければならぬように、歴史とくに外国の經濟史・政治史・外交史（以後外交史は政治史の中に繰り込もう）を研究するものは一つの言葉を見るのにも慎重でなければならぬということ、成城大学に迎えられる前から肝に銘じていた。そうでなければ「真理を知る」ためにいくら多くの文献を見てもなにもならないということ、若干例を挙げて示しておきたい。例えば、“stockholder”という言葉の意味はと問われれば、多くの人は先ず『株主』と答えるだろうが、それは十九世紀中葉から一般にアメリカでそう言えるようになったが（今はイギリスでも通じる。アメリカでもともと“stock”は有価証券のうちでは公債・国債証書の意味であった）——イギリス語で「株主」は“shareholder”である——、古いイギリスの文献・史料で使われていたそれは「家畜所〔保〕有者」である（現代オーストラリア英語では特に「大牧畜業者」を言う）。成城大学に職を得てからのことであるが、或る学会の或る年の年次大会で、或る研究発表者が十六、七世紀頃のイングランドの地図を見たところ、どこそこの地域に多くの“stockholders”がいることがわかった、そのようにイギリスでは早くから「株主」が現われており、かくしてイギリスでは早くから産業革命が起りつつあったことが立証されるという趣旨のことを言うのを聞いて驚いた。その“stockholders”は家畜のうちでも羊の所有者たちだと知っていれば「囲込み運動’（“enclosure movement”）の進展とわかるはずである。私は、司会者に「なにか質

間がある方は」と言われた時、研究発表者に「“stockholder”の意味を間違えていらっしやると思ひますが……」
と言わずにはいられなかつた。“Corn Law(s)”をホップコーンを連想して「玉蜀黍法とうもろこし」と思ひものはないだろ
う。では、イギリスでは玉蜀黍をなんと呼ぶ？ アメリカに初期に入植したイギリス人が原住民（周知のようにイ
ンディアンと呼ばれた）が彼等がイギリスで主食としていた穀物とくに小麦のように主食としていた玉蜀黍の栽培
をインディアンから習い自分たちも食べ、後にそれをイギリスに輸出したので“Indian corn”と言う（maizeと
も言うが）——、スペイン語、フランス語でなんと呼ばれているかと思ふと更におもしろい。では、「“corporation”
とは？」と聞けば「株式会社」という答がかえってきそうであるが、アメリカ語で書かれた経済学・経済史の専
門書あるいは経済関係の新聞・雑誌を見ている時ならそれでいいだろうが、アメリカ語の“corporation”は「法
人」であり、法人格を持つ「労働組合」も「大学」も「州」も「地方自治体」も“corporation”であり（イギリス
語で組合国家の構成単位となつた職業組合というような違つた意味もあり——古い文献を見る時は特に注意が必要であり——
“Corporation”は特に「地方・市自治体」を指すが、“Corporation Act”にはまた特別の意味がある）、法律を見る時そのこ
とに注意しないととんでもない間違いを犯す（法律と言へば、またアメリカ語の“Act”という言葉を知らない歴史家や
経済学者が多いのが気にかかるが）——間違つた意味にとつて論旨を展開した研究論文を見たことがある。株式会社
はアメリカ語では正式には joint-stock corporation であり、イギリス語では joint-stock company であり（それ
は株主が会社の負債を無限に負うものも含むので、有限責任の会社の場合は社名のあとに limited の意味の Ltd. を付ける）、
アメリカ語で書かれたもので見ると joint-stock company は法人ではなく、株主が会社の債務を無限に負うもの
をいう、また社名のあとの Inc. は……と書き続けければ、それだけでなんページも書かなければならぬ。

経済史を中心とした歴史の研究に志して五十有余年

經濟史を中心とした歴史の研究に志して五十有余年

しかし、やはり付け加えたいことがある。東ベルリンから西側に逃げ込んでアメリカ軍に保護されて食事を与えられ暖かいベッドに寝かされた二人のソ連兵が翌朝目をさまして「We are capitalists.」と言って喜びあったことを報じた日本の新聞には「われわれは資本家になった」と喜んだと書かれていた。私は現地のアメリカ軍がその二人の元ソ連兵にどれほどの大金を与えたのかと聞いてみたかったが、その記事を書いた新聞記者諸氏は「capitalist」に「資本家」という意味のほかに「資本主義者」という意味があることを知らないのだと思った。

新聞ならかまわないと言う人がいれば、新聞は重要な報道機関であるだけでなく、民衆の自由と権利の防壁であり社会の木鐸として認めたい私は、それは凶器にもなり得ると恐れているので、新聞記者諸氏にもっと勉強してほしいと思つていると言いたいのだと答えたい。私は「資本家制生産」という言葉を經濟史の専門書や学会誌、研究論文などの中で見たことがあるが、無理して新語を造る必要があるかと言いたい。「capitalist」は「資本主義の」という形容詞でもあるから「資本主義生産」あるいは「資本主義的生産」とすればいいのである。「socialist」もそうであるが、「socialist」という言葉を出したついでに「socialism」という言葉に言及すれば、その言葉はアメリカでは「progressivism」（「進歩主義」あるいは「革新主義」と比べてより、明確な具体的な計画をもって改革をはかる主義・主張を指し、マルクス主義が「socialism」であることは勿論であるが、それほど社会全般にわたる改革でなくとも、例えば貧民窟を取り払い、その代わりに公営住宅を建設して貧しいものにより、良い住宅を安い家賃で提供しようとする）ことも、貸家業者、共同住宅業経営者などおよび彼等の代弁者あるいはそれを企業の自由に対する政府の挑戦と見る人々などによって、その限りにおいて「socialism」と言われたのであり、そのような計画の提唱者や支持者は「socialist」と呼ばれたのである。過去形を用いたのは近年ではそのように言われ

たり呼ばれたりすることが少なくなったからであるが、戦前までの文献その他の資料ではそれらの言葉は通常のように用いられ、一九五〇年代にでも保守的な政治家として知られていた或る共和党の上院議員が公営住宅の建設を提案して“a socialist”と呼ばれ、日本の新聞で「社会主義者」と書かれたのを見ている。そして、特に十九世紀末や二十世紀の初めに、例えばちょっとした農民運動でもその要求の中に鉄道の国有化や紙幣の増発によっての農民の救済の計画を含めていれば“socialist movement”と呼ばれたのである。そのようなことを知らなければ、保守的な政治家でもちょっとした農民運動でも「社会主義者」や「社会主義運動」と理解することになり、「アメリカはこのように驚くほど保守的、反動的な国」という結論が引き出されることになる。そのようなことは、研究論文や学会での研究発表でも新聞のコラムでも見たり聞いたりして、驚いたことがいく度もある。

また、アメリカの“national bank”, “state bank”が「国立銀行」「州立銀行」と邦訳されているのを見たり聞いたりして(「国法銀行」「州法銀行」と邦訳すべきであるが)、明治五年(一八七二年十一月制定の)国立銀行條例を思い出さずにはいられなくなった。アメリカで“state university”は確かに「州立大学」であるが、“national bank”をあくまで「国立銀行」と言っているというのであれば、日本の国法(学校教育法)にもとづいて設置された大学はすべて「国立大学」と言わなければならないと言いたい。また、経済史の専門書や研究論文を見て気にかかっている言葉の一つに「古典的荘園」という言葉があるが、その原語を見て辞書を引き直ぐわかるように「標準的な荘園」或いは「典型的荘園」と言えばよく、そう言う方がわかりやすく、標準的でない非典型的な荘園も多くあったことを論じやすいだろう。「古典的荘園」でない荘園は「近代的な」或いは「崩壊過程の」荘園なのかという疑問もなくなるだろう。また、“imperialism”という言葉を「帝国主義」と邦訳するのはいいが、

経済史を中心とした歴史の研究に志して五十有余年

経済史を中心とした歴史の研究に志して五十有余年

通常のその語源がローマ帝国のような植民帝国をつくらうとするのかと言われたイギリス（特にその保守党政府）の対外膨張政策にあり、英・米の一般の学者が十九世紀末から二十世紀にかけての列強の対外膨張政策の意味に用いていることを知らず、資本主義の最高段階ないしは独占資本が政府に行なわせる対外政策とするレーニン流の定義にとらわれ（日本の学者の多くがそうではないか）、資本主義の大国の対外政策をすべてそれに結び付けて考え、それに適合すると思うなことを拾い集め或いは事実を深く調べもしないで結び付けて歴史を理論づけたとしているものを見るにつけ、それらの人は「ソヴィエト帝国主義」という言葉を見たら、ソ連も資本主義の最高段階に達したか、ソ連にも独占資本があったのかと戸惑いはしないかと思う。また、統計書を見る際には……と書き続ければまたなんページも書かなければならず、ますますこのようにことに就いて本を書きたくなくなったが、ともかく私は学問を職業とする前から、このようなことにも細心の注意を払っていたのである。

私は、人間として誠と道義に反することはほしまいと常に心がけているが、事学問に関する限り、マルクスが言ったように「すべてを疑え」と自分自身に言い聞かせながら（それ故、マルクスが述べたことを先ず疑うことになったのは五高生時代のことであったが、資本主義の末期現象が現われたと思われることなく、資本主義が発達したばかりのところかまだそれにも至らないところでマルクス流の社会主義＝共産主義が根付き発達したのを見れば、マルクスの言葉をますます疑いたくなるではないか）、「真理を知る」ことに努め、私より多く「知」っていると感じたすべてのものを師として学んできて、ウェーバーが言った「僥倖」をつかむことができたことを喜び、彼が「仕事に帰れ」と言っても私の仕事は「大学教師」なのだから定年まで大学教師という仕事をしていたい、それ以上の仕事はない、ほかに帰る仕事はないと思いが、余人を以って代え難い講義ができるよう研鑽を積みたかと思つた。なお、私

は気性が激しいことを自分で知っており、それを抑えるのに苦勞してきたが、そのような気性は研究論文を書くことで発散させれば穏やかな人間になると思ひもした。

それにつけても、多くの人が見落している、歴史をつくり歴史の方向を決定する根本的な力になったものを探らなければならないこと、なにか断片的な史料を色眼鏡めがねをかけて見て浅知恵で解釈し、そしてそれを敷衍して全体を見ようとすると過ちを犯してはならないということを、成城大学で学問を職業とすることができるようになるまでの小さい時からの経験と、他の人たちがどう見ようと私なりに続けた苦闘で、私に学ばせてくれた「天」（キリスト教では「神」と言うだろう）に感謝した。そして、そのため、私がその「原始十三邦ウツナカの」独立と「国民国家」の建国の理想が私のイデオロギー（「人間の行動を決定する根本的なもの考え方」ということを端的に示すそれほどいい言葉はないと思う）に合致し、多民族国家なるが故に多くの民族が背負って来た文化を知らなければその全体像を理解できず、それが一つの国をつくっているために国際社会の諸問題を考えるのにも役立つ、またヨーロッパその他の諸国の既成の秩序を嫌い歴史的・社会的制約からの自由を求めた人たちによって築かれ、純粹培養された（そのために外部からの肥料が必要であったにしても）資本主義が弊害を現わした時に自己浄化をどのように行なったかを見ることができ、そして日本と最も親密な関係を保ってほしいアメリカの歴史の研究を中心にすえて——そのまた中心を経済史にしようと考えて——自分の学問の道を歩むためにアメリカに行きたいが、「木を見て森を見ず」ということにならないよう充分視野を広げるまで、そして開戦時以来のアメリカ人の日本人に対する気分も収まり、敗戦国民への憐みの気持もなくなり、アメリカ国民と対等の国民として話しあえるようになるまで、そして私自身アメリカの学者に会っても劣等感を持たずにすむ学力をつけるまでアメリカに行くのを延ばし

経済史を中心とした歴史の研究に志して五十有余年

經濟史を中心とした歴史の研究に志して五十有余年

たいと思った。そして、日本にいても見ることができ日本から注文して買うことができる研究資料は日本で見えおき、アメリカに行ったら、アメリカでの貴重な時間を少しでも無駄にしないようにしようと思い、またアメリカの歴史をつくり、アメリカの歴史の方向を決定し、アメリカを支えている一般大衆のことを知るために一般のアメリカ人と話す機会が多いようなホテルに泊まり歩きたいと思った。できる限りアメリカ人社会の中に入っていくかと思つたのは、ジャワで異民族に接し、彼等が私を異教徒とも異民族とも思わず、私を日本軍の従軍者と知つていながら日本軍に知らされれば自分たちの身を危くするようなことまで「同じ人間として」私に話してくれ、貴重な多くのことを教えてくれたことを常に忘れずにいたからである。

私は大学で講義や研究指導を行なう時は、紋付・袴を付けて学を講じているという気持でありたいと思つて、家紋（三割剣唐花）を付けたネクタイ止めを付けることに決めた。なお、私は成城大学で講義を始める前にも、それ以後も、經濟史や私が担当する他の科目が他の大学でどのように講じられているかと思ひながら、できる限り多くの大学の「講義要項」をいろいろな手段を講じて手に入れ或いは見せてもらい——後にはいくつものアメリカの一流大学の講義要項を手に入れた——、他の大学での講義よりすぐれたものにしたかと思つたことも付記しておきたい。

七—(一)

私は、もともと歴史は現代を理解するために研究すべきものと思つていたし今もそう思っているが、そしてそのために過去の歴史事実を正確に詳細に理解し——自分の主観や、既存の学説・史観に迎合し或いはいわゆる進

歩的文化的見解を示して虚名を得ることになりそうな見解にとらわれて、前後の因果関係によく注目せず枝葉と想って切り捨てたものが幹であったりすることがないよう、後に大木になる種子や萌芽を見落すまいと注意を怠らず、できる限り多くの歴史事実を広く且つ深く考察し——、そのためには経済学、政治学などの新しい理論をかりるにしても（できる限りそれに努めた）、それぞれの時代の事情を充分考え、いわゆる「現代的解釈」に陥らないよう努めてきた。「歴史に学ぶ」という言葉を聞くたびに、生半可な、片寄った、浅薄な歴史の知識に頼るのは危険と思い「アメリカの歴史家フランシス・L・ローウェンハイムも説いているように」歴史家の責任は重いと思っている。念のため断わっておくが、私はそう思っているも教訓目的の古式の歴史を書くつもりはない。

私がチャールズ・A・ビアードの *The Economic Basis of Politics* その他を読んで経済学部に入学したと思うことは先に書いたが、その後彼がなぜそう考え、経済決定論 (economic determinism) と呼ばれるような史観の創始者になったかという理由や彼にそのような史観を樹てるヒントを与えたのはだれかということも知り (*The Federalist Papers* 中の第十論文を書いたジェイムズ・マディソンであるが)、経済決定論にも長い間不満を感じていたところ、私が法務府事務官をしていた頃、彼が戦後に書いたその改訂・増補版と *President Roosevelt and the Coming of the War, 1941* を読んで、いよいよ経済と政治の交互作用を基軸にし——私は人間性に深い関心を持ち、アメリカの証券業者（残念ながら、その名を思い出せない。学者でないともみずから書いていた）がアメリカの経済史の本を書き経済史を見るのに人間の心理、大衆の心理を見逃してはならないと力説しているのに大きな感銘を受け、それをどう取入れようかと考えながら——アメリカ史を書いたのが、私の最初の著書『アメリカ経済社会の形成』（昭和二十九年、小峰書店発行）であり、それでは政治史の色彩を強く出し過ぎたと思ひ経

経済史を中心とした歴史の研究に志して五十有余年

経済史を中心とした歴史の研究に志して五十有余年

済史に重点をおき、政治史をできる限りその背後にかくし（と言っても、その基礎においたという意味ではない）、詳細にしたもの（後にジョン・ケネス・ガルブレイスが“countervailing power”と呼んで注目を洗びたものも示唆し、明示すればよかったと思ったことがあるが、今ではその程度でよかったと思う）が私の二冊目の著書『アメリカ経済史』（昭和三十二年、関書院発行）である。なお、それらの著書を書く前、一九五二年（昭和二十七年）の夏に東京大学で開かれたアメリカ研究セミナーでスタンフォード大学のジョージ・H・ノールズ教授（*The Presidential Campaign and Election of 1892*）その他の著者。私は同教授に大きな学恩を受けた）の講義を聴いたが、ノールズ教授がその時「社会科学では実験ができないと考えられているが、歴史の研究によってそれを「頭の中で」することができる」と言われたことが特に強く印象に残っている。

私が、「アメリカカ木綿工業における工場制度の成立」（昭和二十八年九月、成城大学『経済研究』創刊号所収）、南北戦争前のアメリカ合衆国における金融機構（昭和二十九年四月、国学院大学『政経論叢』第三卷第一号所収）、「アメリカにおける金融資本主義の成立条件」（昭和二十九年十月、成城大学『経済研究』第二号所収）、「アメリカにおける金融資本主義の衰頹」（昭和二十九年十一月、東洋大学『経済学論集』第一集所収）、「アメリカ金融資本主義と第一次世界大戦」（昭和三十年二月、成城大学『経済研究』第三号所収）、「アメリカ資本主義発達史上におけるイギリス資本」（昭和三十年九月、成城大学『経済研究』第四号所収）、「第一次世界大戦前におけるアメリカの対外投資」（昭和三十一年十一月、東洋大学『経済学論集』第三集所収）、「第二次世界大戦直前までのドル外交とアメリカ資本主義」（昭和三十一年二月、成城大学『経済研究』第五号所収）、「米西戦争とアメリカ実業界」（昭和三十一年九月、成城大学『経済研究』第六号所収）、「孤立主義の放棄とニュー・デイルー——一九三七年から一九三九年初頭まで——」（昭和三十

二年十二月、成城大学『経済研究』第七号所収、「第二次世界大戦の接近とニュー・ディール」（昭和三十三年九月、成城大学『経済研究』第八・九合併号所収）などを矢継早に書いたのは、前掲の『アメリカ経済社会の形成』を書いて思うように盛り込めなかったことやその後補いたいと思ったこと、『アメリカ経済史』を書いてもそう思ったことを詳細に論述したかったからである。それらの中で、特に、アメリカ資本主義の発達に鉄道に対するイギリス資本の投資に負うことが大きく、その投資を仲介した銀行家が産業を支配することになったこと、そして金融資本主義の爛熟が大不況と経済に対する国家の介入を招いた一方、特に大資本は高い利潤より安全で確実な利潤を求める臆病なものであり、国家の安全より利潤を求める利己的なものであることを示した。

私が助教授を経て教授に昇進したのは昭和三十三年四月のことであるが、最初の著書を書いていた頃から、一般教育科目の「現代史」も担当することができるようになった——暫く文芸学部での合併講義だったが、後に文芸学部でのそれは「政治史」にされ、それも数年間担当した——のは大きな喜びだった。また、「日本経済史」の講義も必要と言われて日本経済史専攻（特に明治以降）の教授が昭和三十年四月に來任されるまでの極く短い期間であったが、江戸時代に入ってから「日本経済史」の講義をすることができたのも楽しい思い出になっている。また、「欧米経済史」が「西洋経済史」と「アメリカ経済史」に分解され（その時、私はアメリカは西半球にあり西洋ではないかと思って太平洋の方へ東の方を見たらアメリカが見えたような気がしたが）、私が「アメリカ経済史」を担当することになり、「経済史」と「東洋経済史」担当の内田直作教授が昭和五十一年三月に定年退職されて私が「経済史」も担当することになった。私は、更に「欧米経済事情」の講義も、その専門の教授が來任されるまでの二十数年間「歴史的視野に立って」担当した。書き落とすところだったが、「外書講読」を数年担当したは

経済史を中心とした歴史の研究に志して五十有余年

経済史を中心とした歴史の研究に志して五十有余年

か、「英会話」の非常勤講師が夏期休暇中に死去され、私は代役として学年末まで「英会話」を担当したこともある。なにはともあれ、私は自分の研究を進めながら担当したい講義と学生の研究指導ができれば満足した。

そのようなことより、研究成果の発表に就いて書きたい。私は、前掲のものに続いて「開港と日米貿易関係の発端」（昭和三十四年十二月、成城大学『経済研究』第十一号所収）を書いたのは、外交史家デクスタ・パーキンズのアメリカ史上の好況・景気後退・不況と対外政策・戦争との関係に就いての「景気の上昇・好況は国民の意気を高揚させて積極的な外交政策をとらせ、景気の後退・不況はその逆……という」論考を見、そのような見解は民主主義国イギリスにも妥当すると思いつながら、アメリカの日本に対するそれに就いて考察したかったからであり（景気と対外政策の関係は私の研究課題の一つである）、パーキンズの言う国民の「意気」の問題がウェーバー、ゾムバルトなどが取り上げた資本主義精神、更に先に触れた人間性や心理に就いての深い関心と重なり、私はプロテスタンティズムの倫理、合理主義・営利主義の精神、社会的進化論にもとづく精神、所有と経営の分離、経営者の社会的責任などに注目しながら「アメリカの企業家精神——その歴史的考察——」（一）—（三）（昭和三十五年五月、十二月、昭和三十六年十一月、成城大学『経済研究』第十二号、第十三号、第十四号所収）を書かずにはいられなかった。その（四）も続けて書きたかったが、アメリカの企業家精神を見ているうちに、それと関係が深い経済と政治の交互作用の研究に戻り、それに「アメリカの企業家精神」の（四）以下を盛り込めばいいと思って書き始めていたのが「シードア・ローズヴェルト大統領のビッグ・ビジネス対策」（昭和四十年十月、成城大学『経済研究』第二十二号所収）で、それを書きあげるまでに四年近くかかったのは、前に書いたように私が歴史家として競争相手に選んだケネディが大統領になってしまったが、*Profiles in Courage* を書いた彼が、彼が書いたような勇氣ある人かよく見たい

と思ひ、またやがて歴史になるであろう特に彼の政策とその根底にあるものをよく見たいと思ひながら資料の蒐集に努め、更に特に彼の経済政策のための経済学の研究にも努めていたことによるが、彼が暗殺され大きなショックを受け（後に述べるように胃の具合が一そう悪くなった）、彼のリベラリズム（この言葉を、彼が大統領選挙戦を戦い大統領に当選した後も日本の新聞はこぞって「自由主義」と訳し、リベラルな彼を「自由主義者」と報じていたが、彼がビジネスの規制を主張したので間もなく新聞記者諸氏はそう邦訳しては変だと思つたのだろうか、リベラリズムと片仮名で書き、彼を「リベラルな人」と書き始めたことを覚えてゐる。アメリカでは「liberalism」という言葉は特に十九世紀末頃から「穏健な革新主義」という意味の言葉なのである。なぜかと問われれば、「すべての新聞記者は歴史家でなければならぬ」と答えておこし）——そして、私は私の言う「自由主義」とは新聞記者諸氏がその邦訳では変だと思つたアメリカ語でのリベラリズムであると明記しておかなければならないが——の源流を示して論述したいと思ひ、続いて「ウィルソンの経済思想と改革精神——その形成過程——」（昭和四十一年十一月、成城大学『経済研究』第二十四号所収）、「ウィルソンの経済思想と改革計画——ニュー・ジャーシー州知事時代を中心として——」（昭和四十二年六月、成城大学『経済研究』第二十五号所収）、「ウィルソン大統領の経済思想と立法計画」(一)―(四)（昭和四十三年三月、十一月、昭和四十四年三月、九月、成城大学『経済研究』第二十六―第二十九号所収）、ウィルソンとプログレッシヴ・ムーヴメント——進歩主義者としてのウッドロウ・ウィルソン——(一)―(二)（昭和四十四年十二月、昭和四十五年三月、成城大学『経済研究』第三十号、第三十一号所収）——ウィルソンの「人と思ひ」は私が若い時からよく研究してみたと思つていたが——を一気に書く準備をしていたからである。そして、私は、続いて「革新主義の時代におけるフランクリン・D・ローズヴェルトの社会経済思想」（昭和四十五年十一月、『成城大学経済学部創立二十周年記念論

経済史を中心とした歴史の研究に志して五十有余年

経済史を中心とした歴史の研究に志して五十有余年

文集』所収)を書き終えると直ぐ東京国際空港(羽田)に向うタクシーに乗り、タクシーの中と空港の待合室でその原稿を読み返し、空港まで連れて行った娘・典子(学者魂を叩き込もうと思ってそう名付けた)に原稿を託し、印刷の校正も頼んで、一九七〇年九月十五日にアメリカに向った。

私は二十余年前「週の粟は食まぬ」と思ってアメリカから与えられる資金での留学は嫌だと思ったことを思い出し、成城大学から旅費を受けて行くのだし、広く歴史に就いてならアメリカの歴史家と対等に話ができる自信を持ったうえでアメリカの一般の歴史家なら知らないようなことを知るために行くのだからなんの引け目も感じる必要はないと思いつながら、初めてアメリカの土を踏んだ時、私はどうしても故郷に帰ったような気がしてならなかった。そして、スタンフォード大学の歴史学部に行ってノールズ教授と再会し、同教授のはからいで思いがけないほどの研究のための便宜を受けることができた。また、歴史学部のそばの戦争・革命および平和に関するフーヴァ研究所(Hoover Institution on War, Revolution and Peace)に行つて研究資料の閲覧を請い、話をしている、狭いながらも個室の研究室を与えられた。私は出身大学(もう名称も変わった、旧制のそれではない)の図書館に行つてもそのような待遇を受けたことがなく図書館の館外貸出ししてもらえないので、その後もスタンフォード大学に行つて、その大学こそ母校と思わずにはいられなくなっているが、他の大学の歴史学部(アメリカでは経済史は多くそこで講じられている)や図書館に行つても心暖まる待遇を受けた。議会図書館(Library of Congress)に行けば、いくつかの部屋に案内され、いろいろたずねられテストを受けているような気持ちになっていたら歴史、経済、政治、法律等々の図書の書庫・文書室ドキュメントに入ることが認められるカードを渡され、個室ではなかったが、部屋だけでなく専用の机まで決めてもらえた——しかし、時々、日本の古文書・古地図を見せられ英語イングリッシュにし

てほしいと頼まれたり、『孟子』『老子』などの一部の英訳をアメリカ人の研究者（東西思想の比較研究者）に頼まれたりして快感を味わったが、なにをここに来たのかと思ひもした。そのほかの所に行っても、アメリカでは紹介状より個人を個人として信頼してもらえろということを実感した。

私はせっかくアメリカに来たのだからと思って、中西部、東海岸に行った時も西海岸に帰った時も、日本人が泊まらないようなホテルを選んで泊まった。そのようなホテルのロビーでアメリカの中小企業者、行商人、職さがしに来ていた失業者、牧童^{カウボーイ}などと話して感嘆したことは（ホテルのメイドからでさえそうであった！）、彼等アメリカ人は私が職業をたずねられて「大学教授」と答えると——日本で日本人からならそれですむか、せいぜい「どこの？」と聞かれるだけだが——「どこの国の？」と聞かれるより、即座に「なんの教授？ 専攻分野は？」と聞かれたことだった。そして、彼等が皮膚の色を異にしても、いかに自分の国の歴史が好きかということと、いかに自分の国の歴史が好きなものに親近感を持つかということを知ることができた。そのようなことは大都会の一流ホテルに泊まったら絶対にわからないことであった。また、小さなホテルのロビーでTV映画の“The FBI”を見終わった時、私を日本人と知っていた周囲の人たちから「日本人はみな個人としては極めて善良と聞いているが、日本にも刑務所があるのか？ あるのならいくつ？ 服役中のものはなんくらいい？」と聞かれ、元法務府事務官の私も日本に刑務所がいくつあったかか受刑者がどの位いたか知らず冷や汗を流しながら、そのような人たちの信頼に応えなければならぬと思った。また、首都ワシントンの公立図書館でホテルに帰るバス停への道をたずねたら「西部から来た歴史家なら乗馬が得意だろう。八十年ぐらい前には近くに貸し馬屋があったようだが、いまはどうかな」と言いながら（私は「馬を借りたらペンシルヴェイニア・アヴェニュー一六〇〇番地の

経済史を中心とした歴史の研究に志して五十有余年

家に馬を乗りつけてみたい」と言ったが、バス停に案内してくれた人があり、私はそのようなジョークが大好きなのでそのほかにいくつもの例を挙げたいが、私が大学以外では「経済史の研究者」と言わないことにしたのは、そしてたずねられない限り特に「日本から来た」と付け加えないことにしたのは、日本製品のアメリカ市場への進入が「第二の真珠湾〔攻撃〕」と呼ばれ始めていて、日本の市場の閉鎖性、アメリカに対する甘えなどに就いて考えればアメリカの企業の非効率その他のアメリカ経済の弱点に気付いていても反論できず、「日本の経済史の教授なら日本の政府や実業界に影響力があるだろうから私たちの窮状を伝えて救ってほしい」と頼まれ、専業大学教授の無力を嘆かなければならなかったからである。

初めてアメリカに行つて恐しい思いをしたことも書いておかなければならない。アーリングトン国立墓地に行きジョン・F・ケネディの墓の前で感慨に耽つていて、ふと気がつくとき私の側にだれもいなくなり、私はあわててバス停への道と思つた方へ歩いていたら、周囲は墓ばかりになり、あの丘に昇れば道がわかるだろうと走れば丘の上から銃を持った衛兵から誰可され、バス停への道をたずねても「多分あちらだろう」と言われて墓の間の道をまた走り、方角さえわからなくなって広大な国立墓地の中でしゃがこんでしまった。日が暮れたらと恐しく、この墓地は初め南北戦争中につくられたのだからタイム・マシーンに乗せられてアメリカの歴史の中に引きずり込まれるのではないかと恐しく、太陽の位置で方角を知ろうとして空を見ても太陽は見えず、「アメリカと日本の掛け橋になるような歴史家になりたいと思つているのだから、ケネディ君、一九七〇年十二月に戻してくれよ、そうなることを誓うよ」と言つて、日本語では通じないかと思つて英語で言つたり、アーサー・M・シュレジンジャは経済史を知らないから間違つたフーヴァ批判をしていると思つて恐しさを忘れようとしたりしながら

走るに走れず歩いていると、思わぬ助けが現われて、タクシーを見ることができ、現世のものに間違いはないと見定めてから乗った。私はその後ワシントンに行っても、その時の恐しさが忘れられず、アーリントンには行かなかった。あの時に誓ったような歴史家になるまで、私はそこに行けない。

アメリカから帰って、それまでに集めていた資料、そこで集めることができた多くの資料、後にはそこで得た友人たちから送ってもらった資料、日本から注文して買うことができた新しい研究書、その後アメリカに行つて見たり集めた資料等々を参照しながら、私は、シュレジンジャの欠点は先ずなにより経済史を知らなうことにあるし、彼は *The Age of Roosevelt* (3 vols.) の第一巻 *The Crisis of the Old Order, 1919—1933* の中でフーヴァの政策を酷評することによって第二巻の *The Coming of the New Deal* を盛りあげらせようとして、フーヴァの「改革者」としての面をとおおい、彼の不況克服のための計画や提案を見落し、民主党議員たちやしばしば彼等と手を組んだ目立ちがりやのいわゆる革新主義的共和黨議員たちによって（アメリカでは党の指導者たち或いは党内の多数のもの的一致した意見に公然と反対して反対党と手を組み或いは反対党を利するような言動を議場でもとる人たち或いはグループがあることが普通であることは日本では考えられないだろう）彼の計画が葬られたり彼の在任中に実施されないようにされたり、効果があがらぬもの或いは逆効果を生じさせるものにされたりしたことを見ていない——結果だけ見ていると思つた——ので、それらを突けば、彼の *The Age of Roosevelt* の基礎構造を崩せると思つて書き始め、その十三年後によくやく（と言っても、それだけに専念していたのではなく、そのための研究に関連して絶えず頭の中に湧き起こってくる次の、更にその次の研究のための、更にそれらを総合した研究のための準備をかさねていただけでなく、前に書いたことを補うものも書いていたが）フーヴァが最悪の事態の中でホ

経済史を中心とした歴史の研究に志して五十有余年

經濟史を中心とした歴史の研究に志して五十有余年

ワイトハウスを去る時まで書いて彼の不況対策（正確には不況克服計画と言うべきだろう）を高く評価しようとしたのが「フーヴァー大統領の不況対策」(1)——(2)（昭和四十六年十一月、成城大学『經濟研究』第三十六号所収——途中は省略する——昭和五十九年十二月、成城大学『經濟研究』第八十七号所収）であるが、私はその(2)の中で、一九三二年夏から好転した景気が十一月の選挙でフーヴァーと共和党が大敗を喫すると政治上の空白とローズヴェルトが「ニュー・ディール」によってどんなことを行うのかという經濟界の不安によって悪化したのに加え、次期大統領ローズヴェルトと彼の協力者たちが十二月から一九三三年三月の初めにかけて事態の悪化を誘導し、三月四日に彼が大統領に就任する日を最悪な事態のものにさせ、すべての国民が彼に救いを求めるようにさせて彼の大統領就任をドラマティックなものにさせ、彼がその旗手に選ばれた民主党の政〔策〕綱〔領〕の中で第一と第二に掲げられたこと（特に政府経費の節約による予算の均衡と健全な通貨）とそのほか選挙戦中の彼の公約のいくつかも破らなければ実施できないニュー・ディールの開始を容易にさせたと見るべきではないかと書いた。そして、私は二十六回にわたって書いた「フーヴァー大統領の不況対策」を圧縮したり、それを書いた後に得た資料を見たり考えたりして書かなければならなかったと思つたことを加え、更に前記の(2)に続けて書きたかつた「結論」と彼の不況対策のニュー・ディールへの影響——その(2)を書いた後一回で完結のものを書かなければならなかつた機会にニュー・ディールのうち賞賛すべきものがフーヴァーの計画の中に含まれていたことを指摘した「フーヴァーの不況克服計画のニュー・ディールへの遺産」（昭和五十五年十二月、『成城大学經濟学部創立三十周年記念論文集』所収）を書いたので——を極く簡単にまとめて「結び——ニュー・ディールへの道」として付け加え、これでようやくシュレジンジャの不朽の名著といわれている前掲書の第二卷 *The Coming of the New Deal* 第三卷 *The*

Politics of Upheaval, 1935—1936 (当然、第四巻、第五巻……を書くべきなのに、彼は第三巻でやめてしまった)の根底をなす第一巻の根底を覆すことができたと思つた。それが、『成城大学経済学部研究叢書』の中の一巻として世に問うことができることになつた『フーヴァ大統領の不況対策——ニュー・ディールへの道——』(昭和六十年九月、千倉書房発行)である。

なお、私が成城大学『経済研究』所収の前掲の研究論文ではフーヴァーと書き、右の著書ではフーヴァとしたのは、フーヴァーと書き始めそう書き続けていた時、戦争・革命および平和に関するフーヴァ研究所の高等研究員と話ししてフーヴァと書くべきだったと気付き、次回からそう改めたいと思つたものの論文の表題の中にフーヴァーと書いてしまつては改めることができず(フーヴァーと言っても通じていたことで一応安心し)、そのままにして続け、著書で訂正することにしたためである。また、フーヴァが現職の大統領でないのに論文や著書の表題の中でフーヴァ大統領と書いていいかとたずねたら、そう書かない方が普通だが日本ではその方がわかりやすいだろうと言われたし、ローズヴェルトに就いてはビアードの著書の例があるし、『ハーバート・フーヴァの不況対策』では彼の商務長官時代のそれも詳しくしなければならず、彼が大統領をやめた後にニュー・ディールを批判しながら提唱したことも書かなければならないし、『大統領としてのハーバート・フーヴァの不況対策』では堅すぎるとも思い、『フーヴァ大統領の不況対策……』にすることにしたのである。

私は「フーヴァー大統領の不況対策」(二)を書く前に「F・D・ローズヴェルトニュー・ディール紐育州知事の「不況対策」(昭和四十七年三月、『成城大学大学院経済学研究科創設五周年記念論文集』所収。昭和四十二年四月に大学院経済学研究科が創設され私は「アメリカ経済史特講・特論」と演習を担当し、定年退職前には「経済史総論」の講義も担当していた)を書いた

経済史を中心とした歴史の研究に志して五十有余年

経済史を中心とした歴史の研究に志して五十有余年

のは、一回で完結が必要だっただけでなく、フーヴァが大統領になった時ニューヨーク州知事になっていた（大統領になる望を持ち選挙戦を有利に戦うことができる不況の到来を待っていた）ローズヴェルトの州知事としてのそれを示して論じておきたかったからである。私は、最初の渡米の前に、それまでに書いたものの中から選んだ論文を収録し『アメリカ経済史研究』Ⅰ（昭和四十四年一月、杉山書店発行。後に増補版発行）とし、年代順にアメリカ史上の重要事項を提示し（それらの因果関係を示すことに配慮を加えた）更に簡潔にアメリカ経済史の特性を示したものを付記した『年表アメリカ政治経済史』（昭和五十一年六月、杉山書店発行）およびその改訂・増補版（昭和五十六年発行）を書いて講義を楽に進めるようにしてフーヴァの不況対策に就いて書き続けながら、予め書いておく方がいいと思った「一九三二年のアメリカ大統領選挙戦における不況対策論争」（昭和五十一年十二月、成城大学『経済研究』第五五・第五十六合併号所収）と、前に書いたことをより、詳しく取り上げたいと思って「アメリカ第七十二議会第一会期における『売上税反乱』とその政治・経済史的意義」（昭和五十三年二月、成城大学『経済研究』第五十九・第六十合併号所収）を書き——その時はその九年後に日本の国会で「売上税導入問題」に就いて論争が起こるとは予想していなかったが、それが大衆課税としてまた煩雑なものとしていかに大きな論争の種になるものかということと大不況という非常事態には予算の均衡にこだわらなくてもいいという考が「ケインズがいなくても」特に上院議員の間で起こってきたということを示した——、成城大学での昭和五十五年秋の公開講座の中で私が述べたことを研究論文として見てもらえるように（ほぼ二倍に）加筆した（但し、主要参考文献を付記したが注を付けることができなかった）。「日米経済関係の回顧と展望」（昭和五十六年一月、成城大学編『世界の中の日本』所収）を書き、ニュー・デールを論じる際に歴史家（シュレジンジャもそうであるが、経済史家、政治史家を含むことは言うまでもな

い)がそのための法律の内容と効果を逐一見もしないでいることを嘆き、それでは話にもならないと思って「ニユー・ディール立法の真髄とその経済的效果——一九三三〜一九三四年——」(昭和五十七年三月、成城大学『経済研究』第七十七号所収)を書き、それに続けて第二次ニユー・ディール期のそれらに就いても書きシュレジンジャの前掲書第三巻の批判もしたかったが、「フーヴァ大統領の不況対策」の完結を急ぎたかった。

しかし、多くの歴史家が「歴史事実を云々」と言っているのを見たり聞いたりしているうちに、私が先に書いた『年表アメリカ政治経済史』を『アメリカ政治経済史年表』すなわち単なる「年表」としか見てもらえず、アメリカ史を見て長年月かけて集めてきていたアメリカ史上の「歴史事実」を現代に引き寄せるようにしながら、それらの因果関係を示し、歴史上どう見るべきかということも示したいと思って「アメリカ経済発展の諸要因とその特色」を付けたのにと慨嘆しながら、ではより多くの「歴史事実」を盛り込み、それらに解説を加え、経済史を考察するのに必要な法律、裁判所の判決(立法も裁判所の法の解釈・判決——それらの背景と効果は私が示した前後の事項を見てもらえばわかるはずである——も厳然たる歴史事実ではないか!)にはそれらの要点を明記し、前にもそうしたのであるが歴史の方向を決定したものは何かということに就いて「はしがき」の中でも述べ、更にはつきり政治史と経済史は分離できないものという私の見解を示したいと思つて前著と同様『政治経済史』とし(政治・経済史ではない)、アメリカのそれを他の主要国のそれらと対比させ、そして更に前の付文を詳しくするとともに up-to-date のものにならんと思つて「アメリカ経済の発達——その諸要因と特色——」を書き、それらを総合して書き流せば尨大な本になると思つたのが『アメリカ政治経済年代史——他の主要国との比較を加えて——』(昭和五十九年、杉山書店発行)である。『年代史』は『編年史』を連想させるかも知れないと思つたが、私の独創

経済史を中心とした歴史の研究に志して五十有余年

経済史を中心とした歴史の研究に志して五十有余年

性を示したいと思ったそのような形式をとるとすれば、それ以外の言葉はないと思ってそうしたのである。それは、その原稿を書き終えた時の年（一九八三年）の前年の年末までに就いて書き、一九八三年（昭和五十八年）は大統領の所属政党・上院と下院におけるそれぞれの多数党、その年の第一・四半期の国民総生産と前年第四・四半期のそれとの比較（実質成長率）、一九八三年九月末に終わった一九八三会計年度の連邦予算（とその内訳）、財政赤字と年度末の連邦の総債務残高を示すにとどめた。それに索引を付けたいと思い準備をしていたが、出版社から価格が高くなると言われてやめざるを得なかった。この著書に就いて後に述べたいことがあるが、私は政治史と経済史を分離できないものと見ていても、歴史の中心に経済史を据えていることに注目してもらいたいと思う。最近のことまで加え、もっと満足できるものにさせてくれる出版社を紹介してくださいださる方はないだろうか。

私は、先に掲げた『フーヴァ大統領の不況対策——ニュー・デイルへの道——』の校正を終えた翌々日、その校正刷を複写したものを持って、それまでになん回も行き研究の便宜を受けたスタンフォード大学とその構内のフーヴァ研究所その他にその後の研究のための資料を見せてもらいに行き（私は、再度、成城大学から旅費の支給を受けた。その際、娘は助教授をしている大学から海外研究を認められ、私は娘を連れて歩くことができ都合だったが、娘連れであれば私は「日本人が泊まらないようなホテル」でなく安全なホテルを選ばなければならなかった）、フーヴァの生誕一一年記念日の四日後にアイオワ州ウェスト・ブランチにある彼の墓の前で、「その本はいま印刷中で持つて来ることができませんでしたが、私が日本に帰るころ発行されると思います。その校正刷の複写は持つて来ました。これでシュレジンジャ教授によって不動のものにされたと思われれますあなたの汚名を濯いであげることができると思います。今後一そう研鑽を積み、これを更に強化し……英文でも書きます」と言ったが、そばで可愛

いりすが聞いてくれたことが印象的だった。ボストンでケネディ大統領図書館にも行き、ハーヴァード大学も訪ね、議会図書館にも行き、スタンフォードに戻り、私がまた多くの研究資料を入手して帰国して間もなくその本が発行されたので、校正刷を贈って内容を説明しておいたフーヴァの墓のそばにあるハーバート・フーヴァ大統領図書館 (Herbert Hoover Presidential Library)、スタンフォード大学、フーヴァ研究所など研究のための便宜を受けたところに送ることができた。

なお、サンフランシスコの顔なじみの書店で、その出版を知って直ぐ注文し、催促しても来ないので未刊かと出版社に問い合わせていたシュレジンジャがジェネラル・エディタになり、ジョン・S・ブラウマンが編者、そしてコンサルタントが五名の *The Almanac of American History* (一九八二年七月まで) を見て、買った時、索引は付けてあるにしても、私の前掲の『アメリカ政治経済年代史——他の主要国との比較を加えて——』は単なる *Almanac* ではない、十九世紀中葉以後とくに現代に近づけば近づくほど私が独力で書いたものの方がいい、そして全般的に見て「どちらが経済史、政治史(と別けるなら)」、特に経済学の一分野としての経済史の研究者に役立つか」と嬉しかった。だが、今ならもっと良く書ける。

しかし、競争相手はまだいくらでもある。私が登りたい道はまだ険しく、その上に立ちたい山の頂はまだ遠い。それにしても、私はそのために自分を鍛えてきたし、修練も積んできたし、背負う荷も軽くなった。

七一〇

私が成城大学で講義や研究指導を行なう時はいつも家紋を付けたネクタイ止めを付けていたことは前に述べた
経済史を中心とした歴史の研究に志して五十有余年

経済史を中心とした歴史の研究に志して五十有余年

通りであり、他の大学で非常勤講師（初期には兼任講師と言われた）として講義をした時もそうであったが、それ以外の時は、そのようなネクタイ止めでなければ、「経済史を中心とした歴史の研究に志し」た時の初心を忘れないよう五高のマークが付いたものを使うことにしており、それら以外のネクタイ止めは一つも持っていない。また、ネクタイは、初めてスタンフォードに行つて以来、スタンフォード、プリンストン等々の研究の便宜を与えられ学恩を受けた大学や議会図書館で入手できたそれらのマーク入りのもの（二十本ぐらい持っているが、もっとふやす予定）しか使わず、私はあの「独行道」の中の「常に兵法の道をはなれず」という言葉を忘れないようにしてきたし、今後もほかのネクタイは使わないことに決めている。

それにつけても、私はアメリカの大学に行く（一流大学にしか行っていないが）学生たちが私の学生時代の周囲のものたちのようによく勉強していると思う。日曜日や学年末試験が終わってから新学年が始まる日本の大学が夏休みになっている期間に図書館で熱心に本を読んだり学生食堂で学問上の問題に就いて論議している学生たちを見ると、アメリカの底力を見ているような気がした。そして、近年ますます「日本の大学は入りにくいが卒業しやすい。日本の大学の教育水準は低い」というアメリカの有識者の声が高くなって一方で、日本で「大学進学塾・予備校」業が発展し、その教師たちが生徒たちに「大学の入試に合格するまで頑張れ！ 大学に入つてから遊べ！」と言っているということを聞くと、私は悲しくなる。更に、「学生アルバイト」という言葉を耳にするたびに、学生にとってアルバイト (Arbeit) とは勉学（研究者にとっては研究業績）ではないかと背筋が寒くなる。学生が学費を補つたりより多くの本を買うために（日本語化された）アルバイトをしているのなら敬意を表したいが、そのためにアルバイトが多く見られる風潮を嘆かざるを得ない。私は大学の講義では教えるべ

きことの一部しか教えることができないう思ひながら、どうしたら学生に多くの参考文献を読ませることができ
教育水準を上げることができると受講者が予習をして来なければならぬようなアメリカ的講義の進め方ある
いはセミナー（演習）での討論形式を取り入れようと試みしたが、講義の進行を遅らせることになって断念し
なければならず、時折クイズ（quiz）のクイズではない）を行なったり評点を甘くしまいと努めることしか
できなかつたことを残念に思っている。今では一人でも多く「無知を憎む」ものが成城大学に入学してくれるこ
とを望むだけである。

ここで、私は今まで学会の年次大会に出席して深い感銘を受けたことを一つ書いておきたい。それは、東京以
外の都市の或る大学で開かれた社会経済史学会の或る年（ずいぶん昔のことである）の大会で、会員数名の研究発
表が終わり、出席者たちが会場から出ようとしていた時、五島茂、小松芳喬、高村象平三教授（ABC順。当
時、それぞれ、明治大学、早稲田大学、慶応義塾大学）が並んで前に立たれ、「きょうの研究発表は、ただ一つか二
つの史料を見て新発見でもしたような気になって、私たちが多くの文献その他の資料を見て長年研究をかさねて
きたことを無視したり、批判したりしようとしたものであり、また学生の演習の研究報告の程度のものである」
という趣旨のことを言われたことである。それは、経済史だけでなく、それを含む歴史の研究を行なうものが常
に心にとめておかなければならないこと、特に日本人が外国史を研究する場合に（外から見ると日本人でなければ
きないことをしているその意義を考えて）絶対忘れてはならないこと、全体像をつかむために小さなことも見落とさ
ないようにするのはなく、「群盲象を撫でる」ような態度で小さなことを穿^{ほじく}ただけで長年研鑽を積んだもの
の研究成果を批判したとして自己満足してはならないということを戒められたのだと思ひ、それら三先生のそれ

経済史を中心とした歴史の研究に志して五十有余年

経済史を中心とした歴史の研究に志して五十有余年

までの著書・研究論文を全部読んで大きな学恩を受けていた私はそのような言葉を聞くことができる学会の年次大会こそ有意義なものと感じ、私が前から自分自身に言い聞かせていたことを後進のものに言ってくれたださったことに感謝し、感激のあまり会場を出てから「痛快」と言ってしまった。そうしたら、突然、私は横から誰かに体を小突かれ、気が付くと五、六人の若い人たちに囲まれ（その人たちは研究発表者の中の一人か二人とその仲間とわかった）、「痛快とはなんだ」と言われ、その言葉は適当でなかったと謝ったが、「誠にいい教訓と思いませんか」と言ったところ殴られそうになり、殴られた手に下げていたバッグで張り倒そうと思っていた時、仲に入ってきたさった人たちが、「社会経済史学会で乱闘」という見出しの新聞記事を見なくてすんだ。

なお、そのことは後に私に非常にありがたい機会を与えてくれることになったと思う。私は、その後、その学会と他の歴史関係の学会に出席するとひとりですぐ若い人たちの間にいることを避け、私は兄弟子・弟子という縦の關係を持っていないので、以前から親しかった私より「半年」年長の増田富壽教授（現在、早稲田大学名誉教授）かその他の二、三の旧知の人たちの側にいることにした。私はその方たちに私の防壁になってもらおうという気持ちからそうしたのではないと書いておきたい。そうすれば私は口を慎むことができただけでなく、特に増田教授の側にいれば私が知らないことを教えていただくことができると思っただけでなく、増田教授の人柄が好きだし、また私が中学生時代に歴史家を志すにいたったころ早く上京することを許されたらその高等学院を経て早稲田大学に入りたいと思っただけでなく、早稲田大学で学んでいたら小松芳喬先生に指導していただくことができただろうと思っただけでなく、増田教授を通じて先生の学風に接したかったからでもある。また、私が助教教授のころ初めて学会で研究発表をしたのは早稲田大学であったので、私は早稲田大学と縁が深いのかなと思っただけでなく、一九七三年（昭和

四十八年)十月に増田教授から「来年度から政経学部で講義を」という電話をいただき大いに喜び、名誉教授になられる小松芳喬先生が推薦してくださいましたように伺えばなお嬉しく、翌年四月から早稲田大学政治経済学部で非常勤講師として「現代西洋経済史」を講じることができることになり(十七年間、中央大学経済学部で兼任講師として続けていた「アメリカ経済事情」の講義をやめさせてもらうことにした。二、三年のうちに八王子に移転となれば講義の時間より往復の時間の方が多くなるのでやめさせてもらいたいと思っていた)、その二年後からは大学院経済学研究科でも「西洋経済史特論」と「隔年の」「西洋経済史史料講読」も担当することができることになり(二年半と十六年間、合計十八年半、東洋大学経済学部で兼任講師として担当した「経済史」その他の講義をやめさせてもらうことにした。専任教員になるよう勧められて断って気まづくなっていた折でもあった)、増田教授その他の「西洋経済史」担当の教授の在外研究の際にはその講義の代役も勤めさせていただき、成城大学で定年になると同じ時まで楽しい時を過ごすことができたし、定年退職後もそれまでと同じように館外貸出しも受けることができる図書館入庫証をいただくことができた。

なにをするにも健康が必要だろうが、私は、物心ついてから現在までジャワで二日ほど療養所で熟睡したことを除けば、小学生時代に左足を痛めた時と五高生時代に盲腸を取る手術を受けた時以外は入院したことがないにしても、小さい時から虚弱体質で剣道や居合いで心身を鍛えることに努めても強健な体になれず、特に戦後の苦しい時期から胃弱、低血圧、神経痛などに悩まされ続け、一九六三年(昭和三十八年)の秋から胃の具合が一段と悪くなるとともに約一年間舌の奥が黒くなり眉毛ほどの長さの毛が生えるという奇症状に見舞われたり、一九七一年(昭和四十六年)夏にコレステロールが危険水準を遙かに上回っていると言われ(アメリカから婦

経済史を中心とした歴史の研究に志して五十有余年

經濟史を中心とした歴史の研究に志して五十有余年

った時五十六キロという自己最重量記録をつくっていたが)、食餌療法に努めているうちに食べるのが苦痛になり、食べずにいる方が気分爽快、食べれば不快という状態になって痩せ細ってしまった時、「痩せたりといえど」と居合刀を振り回して腰を痛め、腰椎椎間板症になり、胸から腰にかけてコルセットで締め付けなければならなくなった。そして、私はようやくコルセットを着けなくてもなんとか歩けるようになったので、一九七六年(昭和五十一年)二月末に、春休みを利用してアメリカに行くため新しい旅券の交付の申請をしに神奈川県旅券事務所に行く途中、横浜の路上(横断歩道)で右後方から走って来た自動車に四、五メートル跳ねとばされ(剣道で恐しく強い相手に体当たりをされたかと思つて、倒れると同時に跳ね起きて、「大丈夫か」と言つて顔を出した運転手に「このくらいでへたばるか!」と言つて逃げられたのは二重の不覚)、頭を打たなかったのは裸馬に乗って落馬しても頭を打たぬ練習をしておいたためと思つたが、腰椎椎間板症を悪化させてしまった。私はそれ以来また五年間コルセットを付けて講義をしなければならなくなり、それでも毎日五、六時間の睡眠で足りたし、二日ぐらい徹夜して本を読み全く寝ないでも講義や研究指導をするのに支障を感じなかったが——そして、スタンフォードに行くと思議なことに元気になったが——、コルセットを付けなくてすむようになってからも食がますます細くなり体重は三十九キロになったため、暫く通つた近くの内科医院で紹介状をもらつて市民病院に行き精密検査を受け(胃潰瘍、肺結核その他の病気の痕跡もあり、脾臓との機能と総胆管が異常と診断された)、そこからの薬を飲み始めてから、十年以上にわたつて食べものに就いて考えただけでも気分が悪くなつたのに、食欲がでてきて、一日に普通の人の一食分ぐらゐのパンと米飯を食べることができるようになり、牛肉も人並みに食べることができるようになつて体重が四十三キロに回復し、それが維持できれば無理して多く食べなくていいと医者に言われており、肺氣腫

で同じ病院の呼吸器科に三年余り通ってもいるが、研究活動に支障はない。いや、研究に没頭していなければ痛苦を忘れることができないでいる状態である。

それはさておき、私は大学での講義や研究指導の時などに私の先祖、武士道、兵法などに就いて一度も口しなかったと書いておかなければならない。ただ、私の姓をなん度言っても正確に呼んでくれない人に私の姓の由来に就いて説明し、大学内での雑談中に私のネクタイ止めに注目した人に家紋が付いていると言いつつ、家紋の由来をたずねられれば先祖のことに少し言及しただけである。しかし、この文の中で私が私の氏名の由来、先祖、武士道、兵法などに就いて書いたのは、私が歴史家を志したのは——ほかの歴史家や経済学者は、また、それぞれの理由がおありになると思いつながら——私の場合はこうだと言いたかったためである。また、特に私は小学生時代から多感な十余年間「他国者」と言われて差別され、環境に順応できず反撥して、歴史の研究に志すことに抑圧からの突破口を見出し、そして武士を職業「帝国」軍人と同一視する風潮や戦後に高まった武士階層を擯取階級としてのみ見る風潮の中で、武士こそ「庶民の道德の師表」あるいは「日本文化の担い手」ではなかったかとその全体像をとらえ、武士の末裔として武士の矜持を堅持し権力にも金力にも屈せず生きる道を「自由の砦」と考えた大学の中に見いだした一人の歴史家の胸に秘めた喜びを書きたかったからである。なお、私が私は清和源氏の末裔と言っても、先祖は播磨の一土豪とまではわかっていても、島津氏の先祖が薩摩の一土豪とまではわかっていてもそれより前には正確に遡ることができないのと同じであろうように、それを立証する証拠はなく、一つや二つの古文書を示されても、私はその古文書に書かれていることの真偽を先ず考えなければならぬ歴史家である。ところが、今から二十年余り前、私が現在の住所に移る前に同じ藤沢市内の団地に東京都内から移って来

経済史を中心とした歴史の研究に志して五十有余年

経済史を中心とした歴史の研究に志して五十有余年

て間もなく、見知らぬ人の訪問を受け「どなたですか」とたずねたら、「尾上おのうえです。私は平家ですが、あなたは平家ですか、源氏ですか」とたずねられ、壇の浦の戦から七八〇年近く経っているのにと驚きながら私は「源氏です。清和源氏です」と答えたら、その人は「では、尾上おのうえさんですね。播磨の……。私は薩摩の平家の尾上おのうえです」と名乗りを挙げ、誤配された私あての郵便物を渡してくれた。私は尾上おのうえが源氏でしかも播磨の清和源氏と知った典拠をたずねたのに対し、その人は「先祖からの言い伝え」という怨みが感じられるような返事しかくれなかったにしても（その言葉から、一族の範頼とともに九州に遠征して功があったのが播磨の尾上家の祖ということも知っていると察せられた）、私は平家側の人からも私は播磨の清和源氏の末裔と認められて安堵した次第である。

私にも一つや二つの趣味がある。私は日本史、東南アジアの歴史に関する本を読むことも好きだが、それもできる限り研究の中に織り込もうと思っており、趣味と言える部分が少なくなってきているし、居合刀を振りまわさない方が無難と思うようになってから久しく、なによりの趣味は無邪気な動物たちを見て写真に撮ることであり、私が住んでいるところはそのような環境に恵まれている。私の写真歴は三十余年でいろいろな写真機を持っており、これからもこの趣味を持ち続けるつもりであるが、私は成城大学で定年を迎えることになった時に経済学部と同僚諸氏から極めて優秀な写真機を贈られたことを心から喜んでいる。

八

一九八五年（昭和六十年）九月四日に私は「古稀」を迎え、一九八六年（昭和六十一年）三月末に成城大学を定年退職した。そして、四月一日付けで成城大学名誉教授の称号を与えられたが、私はその時「ハーバート・フー

ヴァのニュー・ディール批判——『フーヴァー大統領の不況対策』の『結論』に代えて——」（昭和六十一年七月、成城大学『経済研究』第九十三号所収）を書いており、二十六回続けた「フーヴァー大統領の不況対策」の締め括りとするとともにフーヴァーの言葉をかりながらニュー・ディール批判を行ない（連邦政府の強大化・多すぎる経済への干渉、巨額の財政赤字、連邦債務の累積……、そして不況克服の失敗を指摘）、続いてフランクリン・D・ローズヴェルトの外交政策に対するフーヴァーの批判を書きかけたが、それにはローズヴェルトの外交政策に就いて論じておく必要があると思ひ——先に示したように約三十年前それに論及したものを書いたが——、その前史から始めることにし、それをまた前に触れたようなソ連の性格も明らかにするための米ソ関係史を書くための序章にしようと思ひながら（ソ連はその経済の成長を図るため平和攻勢の姿勢を強めながら日本の高度技術を導入しようと接近して来るだろうが）、「アメリカのソ連不承認政策と米ソ通商関係の発展——一九三〇年まで——」（昭和六十二年一月、成城大学『経済研究』第九十五号所収）を書き始め、それを書き終えると、通常のアメリカ書の活字と同じ大きさの字も打てる電子タイプライターを買った。

私は成城大学名誉教授になったが、ただ「教壇から去った、教授会への出席を免除された」というだけの気持でいる。私は、前々から成城大学『経済研究』の会誌委員の諸氏にお願いし成城大学経済学部長、経済学会々長・岡田清教授も諒承してくださったと思ひていたが、最後の教授会の際にかさねて今後も在職中と同じように成城大学『経済研究』に書かせていただけるようお願いした。私は、これからこそ、本格的な研究と取り組みたいと思ひており、研究成果を成城大学『経済研究』に逐次発表させていただきたいと思ひ、そうすることによって先に引用したジョン・メイスフィールドの「この地上に大学ほど美しいものはほとんどない」という言葉を思

経済史を中心とした歴史の研究に志して五十有余年

経済史を中心とした歴史の研究に志して五十有余年

い浮べながら成城大学を美しいものなかでも最も美しいものにするためにお役に立ちたいと思う。

こうして、私は定年退職しても、「あすは休講」いや「公然と休める研究日」と思いつながら、二週間に一度の病院（消化器内科と呼吸器科）通いは欠かさないよう努めはしているが、私が書齋兼寢室の机の上を研究を進めるための文献その他の研究資料の置き場とし、少しでもそれらの位置を動かすと予定が狂うとして原稿の下書きや原稿を書く場所として食卓を占領し、当面必要な文献その他の研究資料を食卓の周辺に積み上げ、相変らず一日二回の食事の二回目のそれをますます深夜にしているのが、定年退職後は私が少しは家での生活を改めることを期待していた老妻は——「自分は老人保健法の適用を受けているのに老人と思わず、私はそれにはまだ数年あるのに『老妻』と呼ぶのはひどい」と言うが——「南宋の陸游（放翁）の七十七歳の時の作の詩に『老夫八十に垂たなんとして巖電（＝眼光）尚お爛爛たり、孤灯細字に対し堅坐して常に夜半』とあるからしかたがない」とあきらめ顔である。私が年金と、退職金と貯金の利子で従前の生活を維持できるよう貯金をかさねてきてくれた老妻の苦勞に感謝しながら利率を押し下げる公定歩合の引下げ（それだけでも株式投機熱をあおるのではないか）に腹を立てていると、証券会社から金利の低下に付け入るように投資信託や株式投資を勧め専門家が言うのだから安心してという電話がかかって来るが、それに対して私は「一九二九年秋の株価の大暴落を前にして証券業者の顧問をしていたアーヴィング・フィッシャー教授（当時ハーヴァード大学）でさえ『株価はまだ上る』と言っていたし、ジョン・ピアポント・モーガンは『株価は動くもの』と言ったことを知らないか」と言うことにしている。一人娘は自立して私の家の戸口から歩いて三、四分の所に移って七年近くになっている（私はそれで書庫を一つふやすことができた）が、アメリカ史ではなくアメリカ文学の研究に走ってしまったので、私はその社会経済史的背景

を見させるよう、更に実用・経済英語の教授法をだればばかることなく伝授するため（日本経済短期大学助教授の娘を学生にして）学生一人のセミナーをしばしば行なっているが、本務ではないので「暫く休講」と言っても義務を怠ったことを苦にしないで済むのを幸いと思っている。

「古稀」という言葉を「古来稀」と思わず、「古は稀れいにしえ」なれどと読みたいと思い「人生七十」を「新しい出発」と考え、私の「古稀記念号」を新しい出発を祝っていただけのもとして感謝し、私のこの「経済史を中心とした歴史の研究に志して五十有余年」を書かせていただけたことに特に深く感謝する。これを書かせていただけるとの通知を受けて——私はそれまでなんの準備もしていなかったが——、頭の中に怒濤のように記憶が蘇り、それらが奔流のようになって頭から溢れ出ようとするのを押え、古いものから順序よく噴き出させながら、暮も正月もなく、髭も剃らず、一步も外出せず、食卓に向って書き続け、病院に診察予約日の延期を頼んで薬がなくなくなり、髭を剃って病院に行けば三つ四つの病気をかかえた患者であっても、青・壮年期以上に意気軒昂。「白寿記念号」も出していただき、私はそれにはもっとまじなことを書かせていただくつもりで、これからこそ本格的に研鑽に努めたいと思っている。

意識してそうしたのではなかったが、この項は八で、八という字は末広がりで縁起がいいと喜んでいる。それとも八という字はこれから登るべき山を意味するのか。それなら高く険しい前人未踏の山がよく、その山の頂ひたに一人立とうと、初心と自分自身の歴史を忘れず、広い視野を持つとともにきめ細かに歴史事実を考察しながら新しい大型の日米の掛け橋になるような歴史家になるよう一刻も無為に過ごさず、命が燃え尽きるまで研究に努めたいと思う。そうでなければ、本籍地を元のまま岡山にしている私は、四百年以上前からの先祖の墓が立ち並ぶ

経済史を中心とした歴史の研究に志して五十有余年

經濟史を中心とした歴史の研究に志して五十有余年

墓所の側に父を始祖とする別の墓を建てながら、「全力を尽して生き、使命を果たして来た」と言ってそこに入
って行くことを躊躇しなければならぬ。私はそこに堂々として入って行きたい。そして、死後なお靈魂が不滅のも
のと知れば、後世の志ある歴史家たちと自由に交信できる方法を考えよう。